

目次

	はじめに	2
5	第一章 心 態 詞 の 歴 史	2
	第一節 心 態 詞 ja の 文 法 化	2
	第二節 心 態 詞 doch の 成 立	8
	第二章 ドイツ語副詞辞典の考察	13
10	第一節 心 態 詞 ja	14
	第二節 心 態 詞 doch	22
	第三章 ドイツ語教育における心 態 詞	34
	第一節 日本での心 態 詞 の 扱 い	34
15	第二節 DaF の テ キ ス ト に お け る 心 態 詞 の 扱 い	38
	第三節 今後のドイツ語教育における心 態 詞 の あり 方	45
	まとめ	47
	注	49
20	参考文献	56

はじめに

心態詞(Modalpartikel)はドイツ語の会話において話し手の気持ちを表現するために用いられるものである。ドイツ語母語話者にとって、心態詞は会話の中で自然と出てくるものであり、意識せずに使用しているものである。また、心態詞はそれ自体が意味を持つわけではなく、発話状況によって様々な話者の心情を表現する、いわゆる話し手の気持ちを伝えるためのシグナルのようなもので、特定の訳語を与えることができない。さらに心態詞に属する語は、それ以外に中心となる用法を持っている。

10 以上のことから、ドイツ語学習者にとって心態詞を正しく理解し、習得するということはなかなか困難なことである。しかし、ドイツ語の会話において心態詞は頻繁に用いられるものであるし、生き生きとしたコミュニケーションのために必要不可欠なものである。そこで、本論文では比較的多くの用法をもつ心態詞 ja と doch に注目して、その歴史を調べ、また事典における記述を調査した上で、どのように心態詞を学習すればよいかを
15 考えていく。

第一章 心態詞の歴史

20 今回、心態詞 ja と doch が持つ、すべての用法に共通する意味機能を探すにあたって、そのような意味機能は、やはりその語の最も古い用法にあるのではないかと思う。なぜならば、一番最初に用いられていた用法からその他の様々な用法が派生したのではないかと考えるのが妥当だからである。そこで心態詞 ja と doch について、それぞれの成立の歴史を見ていく。
25 以下、本文中に登場する訳は注記が無い限り筆者によるものとする。

第一節 心態詞 ja の文法化

心態詞 ja の成立に関する研究はそれほど多くない。Opalka (1979)は語
30 用論的視点から心態詞 ja を「発話のシグナル」Redesignal と規定し、その成立の始まりをゴート語に求めた。¹

Hentschel (1986)はゴート語、古高ドイツ語、中高ドイツ語における心

態詞 ja の成立について調べた。Hentschel はゴート語の呼格に存在する ja/ jai が発話命題が現実に存在することを示す「メタ解説」Metakommentare²の機能をもっており、なおかつそれがコミュニケーションの場で使用されていたため、その ja/jai は新高ドイツ語における心
5 ja と同一のものであると述べる。³

しかし Hentschel の心態詞の基準は意味的特徴に視点をおいたものであり、引用される ja の使用例は、その多くが文の前域に用いられているものであったため、W. Abraham (1990)は Hentschel の研究について、心態詞の統語的特徴である「文の中域での出現」が欠けていると指摘する。⁴

10 対して G. Diewald (1997)は Hentschel 同様、意味的特徴から心態詞を捉え、古高ドイツ語においてすでにその使用が認められる doch と共に使用される ja が最も古い心態詞 ja であるとした。⁵

上記の研究がドイツ語の歴史的な時代区分に従って行われたのに対し、Burkhardt(1987, 1992)は年代ごとに心態詞 ja の成立について調べた。

15 Burkhardt によれば辞書の記述から、心態詞 ja の最も古い使用が見られるのは 16 世紀である。⁶

J. Schild (1987, 1992)は、1570 年～1730 年の間に出版されたライプツィヒの印刷物を資料とし、話法詞 Modalwort について調べた。彼は話法詞と心態詞の区別をせず文の中域に出現する ja の使用例を集めた。その結
20 果、16 世紀前半に出版された 70 の印刷物では心態詞としての ja の使用は比較的珍しいものであり、1570 年～1630 年の間の 35 冊の印刷物では心態詞 ja が頻繁に使用されていたことが分かった。よって心態詞 ja の成立は 16 世紀後半であると言える。⁷

次に、H. Simon (1996)は初期新高ドイツ語の時代に心態詞の成立の起
25 源を求めた。彼は統語的特徴こそが心態詞の分類において最も重要であるとし、その時代の教科書においてどのように記載されているかを調べた。1424 年の一冊の教科書では心態詞に関する記述は見られたものの、ja に関しては返答詞としての記述のみが見られた。⁸

Meibauer (1994: 158ff.)は H. Paul & W. Betz: *Deutsches Wörterbuch*.
30 で述べられるように、心態詞 ja は古高ドイツ語と中高ドイツ語において文の前域で使用される ja と時の副詞 je の混合物として出現したと考える。彼は文の中域での出現を心態詞の条件として定義し、初期新高ドイツ語の

テキストを研究した。⁹

そしてこれらの研究を踏まえ Molnár (2002) は心態詞 ja の文法化の歴史を中高ドイツ語のテキストと初期新高ドイツ語のテキストを用いて検証した。Molnár は心態詞の定義を統語論的な規定、つまり文の中域に出現するという点に求めた。¹⁰ また使用されるコーパスは以下の 3 つである。

- 10 A) *Die Reformation im zeitgenössischen Dialog. 12 Texte aus den Jahren 1520-1525.* Bearb. v. W. Lenk. Berlin, Akademie Verl., 1986 (im Weiteren: RD)
- B) Reichmann & K. P. Wegera: *Frühneuhochdeutsches Lesebuch.* Tübingen, Niemeyer, 1998 (im Weiteren: Reichmann & Wegera)
- 15 C) Hartmann von Aue: *Der arme Heinrich.* Mittelhochdeutscher Text und Prosaübersetzung von Wilhelm Grimm. Hrsg. von Ursula Rautenberg. Stuttgart, Reclam, 1987.

まず Molnár は心態詞は文の中域に出現するということ、また枠構造の成立が初期新高ドイツ語の時代であることから初期新高ドイツ語における心態詞 ja について調べた。A)、B)の資料では、時代によって ja/ia/ya の 20 3 つの書き方のバリエーションが存在し、全部で 123 の使用例が見られた。しかし心態詞として文の中域で使用されているものは 19 例だけであった。また平叙文に用いられる心態詞 ja のうち、1 つの例文では要求文で使われていた。

さらに Molnár はこの 2 つの資料において、本来心態詞 ja が用いられる 25 場所に、代わりに je/ie/ye がしばしば見られることに注目した。2 つの資料において je の使用例は合わせて 100 例あり、そのうち文の中域での使用は 39 例であった。そしてこの文の中域に出現する je はおそらく心態詞 ja と同じ機能であると考えた。¹¹

初期新高ドイツ語における je の使用は 15 世紀にすでに見られ、また 2 30 つのコーパスの中で最も新しい je の使用例は 1555 年である。それに対し、文の中域に ja が出現するのは 1523 年が最初である。つまり、初期新高ドイツ語の時代にはすでに文の中域に出現する今日の心態詞 ja のような機

能をもったものが存在しており、それは ja/ia/ya あるいは je/ie/ye という 2 種類の形をしていた。そして 15 世紀にはそれはすでにはっきりと文法化されていたと Molnár は主張する。¹²

5 次に Molnár は心態詞 ja の「施主語彙素」Spenderlexem¹³について調べるために c)のコーパスを使い、中高ドイツ語における心態詞 ja について調べた。中高ドイツ語において ie は「zu aller Zeit / immer」を意味する副詞であるが、複数の場面で時の副詞 ie を今日の心態詞 ja として解釈することができる。

10

1) din muoter und din vater
die enmugen din niht wol enbern
ich ensol ouch niht ir leides gern
die mir ie gnade taten

15 (Hartmann von Aue [1987]: 30)

「そなたの母も、そなたの父も、とうていそなたを手放すことはできません。わたしにいつも親切にしてくれるものたちに、つらい目をみせては相すまぬ。」¹⁴

20

もし時制の副詞として ie を解釈するならば „Ich soll auch nicht ihr Leid verlangen, die mir zu aller Zeit/ immer Gnade erwiesen.“ 「常に私に愛情を示すあなたの苦しみを私は求めるべきではない。」となる。W.Grimm による翻訳では „ich kann auch nicht dessen Unglück verlangen, der mir allzeit Liebe erzeigt hat.“ 「私もまた、常に私に愛を示した人の不幸を求めることはできない。」となっている。また日本語訳でも「いつも親切にしてくれるものたち」と時の副詞として訳されている。

しかしこの文を心態詞 ja の機能で解釈することもできると Molnár は述べる。この場合 ja は、可哀想なハインリヒが彼のために死にたいという少女の両親に苦難を与えないために、という理由づけの機能で解釈できるとい
30 う。¹⁵

同様に Molnár は他の箇所でも ie を心態詞として解釈できるか検証し

た。

2) ich muoz engelten

mines herren zageheit.

5 Mir hant die liute misseseit

Daz han ich selbe wol ersehen.

ich horte ie die liute jehen

ir waeret biderbe unde guot

und hetet vesten mannes muot:

10 So helfe mir got, si hant gelogen

Die werlt was ie an iu betrogen

ir waret alle iuwer tage

und sit noch ein werltzage.

(Hartmann von Aue [1987]: 40)

15

「殿さまが臆病でいらっしゃるので、私がひどい目にあうのです。人の評判は間違っておりますわ。それが、はっきりとわかりましたわ。殿さまは、お侍らしい、りっぱなお方だ、男らしい、しっかりしたご気性だ、と私は聞かされておりました。とんでもない。嘘っぱちです。てんで世間の見損ないです。いまだって、いままでだって、殿さまは大臆病者ですわ。」¹⁶

20

2)の文章の1つ目の ie は間違いなく時の副詞であるし、W. Grimm の翻訳でも „ich sehe wohl, mich haben die Leute getäuscht, ich hörte sie allzeit sagen [...] “ 「私はたしかに人々が私を騙したとわかった。私は、彼らがいつも…と言っているのを聞いた」と時の副詞として理解されている。しかしここでもまた ie を心態詞 ja として解釈することができ、そのように理解すると „Mich haben die Leute getäuscht, [...] ich hörte ja die Leute sagen, ihr wäret bieder und gut.” 「人々は私を騙していた。[...] 人々があなたは実直で誠実であると言っているのを私は聞いたのだから。」となると Molnár は述べる。¹⁷

25

30

2つ目の ie も同様に、二通りの読み方ができる。一つ目は „Die Welt

war allzeit von Euch betrogen.“「世間はいつもあなたに欺かれている。」
となる。では、心態詞として読んだ場合どのような意味になるのだろうか。
この部分はグリムの翻訳では *allerzeit / immer* といった時の副詞として
5 *denn* によって „so mir Gott helfe! sie haben gelogen. Die Welt war mit
euch hintergangen, denn Ihr wart und seid auch noch ein Allewelts-
Feiger“「誓って申し上げるが、あなたは嘘をついたのだ！世間はあなたに
騙された。というのもあなたは今も今までも臆病者なのだから」と言い換
えているのである。これによって、中高ドイツ語における *ie* が本来の時の
10 副詞としての機能以外に心態詞 *ja* の機能でも解釈できることを Molnár は
証明した。¹⁸

次に Molnár は中高ドイツ語の *ie* がもつ心態詞の機能はどこから生じた
のかを調べた。

15 3) *jâ wiltu allez din heil*
an uns verwürken wider got
wan gedenkestu an sin gebot?
(Hartmann von Aue [1987]: 20)

20 「お前が、わたしたちに、そんな仕打ちをしてごらん。それでは神様の
罰が当たって、魂の仕合せをなくしてしまうことになりますよ。お願い
だから、神様のお戒めを忘れずにいておくれ。」¹⁹

4) *muoter, jâ hôrte ich dich*
25 *klagen unde sprechen ê*
(Ebd. S. 26)

「お母さま、さきほどは、お前のお墓を見るのがつらいとおっしゃって、
お嘆きになりました。」²⁰

30 上記の例文からもわかるように、中高ドイツ語において *ja* は主に事前の承
認 (*Vorabzustimmung*) の機能で文頭に用いられた。対して *je* はこれまで

見てきたように、時の副詞かあるいは心態詞として文の中域で用いられた。*Der Arme Heinrich*で見られる ja の使用例はどれも文頭で ja が用いられていた。文頭で用いられる ja は心態詞として理解することはできないため、*Der Arme Heinrich*で見られる ja の使用例はすべて心態詞ではないと考えられる。Molnár の主張では、je は文の中域に出現するため心態詞としての機能を取るのに適していたということ、さらに ja と ie は音的にも、形態的にも似ていたことから互いに混同され今日の心態詞 ja が生まれたという。そしてその際に ie がもつ時の副詞としての意味は欠落し、中高ドイツ語の ja の意味だけが残ったのである。このような意味の欠落あるいは希薄化は文法化のプロセスにおいて珍しいことではないと Molnár は述べる。²¹

このように、心態詞 ja は中高ドイツ語における文頭の ja と文の中域に出現する時の副詞 ie の混同によって生じた。この2つの語は音的にも、形態的にも似ていたので用法が混同され始め、初期新高ドイツ語の時代には完全に文法化がなされたが、その際に ie がもつ「常に、いつも」zu allen Zeiten/ immer という意味は失われ、ja の持つ「事前の承認」Vorabzustimmung という意味だけが残し、それが現在の心態詞 ja なのである。

20

第二節 心態詞 doch の成立

次に心態詞 doch の成立について見ていく。A. Burkhardt(1994)によるとドイツ語におけるもっとも古い心態詞は denn と一緒に使われる doch であり、これは古高ドイツ語の時代から心態詞として使われている。²²

Hentschel はまず古高ドイツ語の時代に doch は逆説の接続詞、副詞、そして心態詞として使われていたことを証明した。さらにこの内、心態詞 doch は願望の意味を表し、決定疑問文、補足疑問文、命令文、従属文としての dass 文、目的を表す副文に用いられると証明した。第一節でも述べたように、Hentschel は心態詞をメタコミュニケーションの機能を果たすものとして意味論的観点から定義していたので、文の中域に出現するという統語論的な定義はここでも考慮されていない。²³さらに Hentschel は、中

高ドイツ語における心懸詞 *doch* は決定疑問文、要求文、断定文、文末が感嘆符で終わる文、そして副文では、関係文や主文のない条件文、つまり今日の願望文において使用されると述べる。²⁴

5 これを受けて Molnár(2002)は Hentschel とは異なり、統語論的な心懸詞の定義を採用し、Hentschel の主張が正しいことを確認した。そしてさらに Hentschel が行っていない初期新高ドイツ語における心懸詞 *doch* についても調べた。

まず Molnár は *Hildebrandslied* を用いて古高ドイツ語における心懸詞 *doch* について調べた。

10

5) „[...] doh maht du nu aodlihho, ibu dir din ellen taoc
In sus heremo man hrusti giwinnan,
rauba birahanen, ibu du dar enic recht habes“.
„der si doh nu argosto“, quad Hiltibrant,
15 „ostarliuto,
der dir nu wiges warne, nu dih es so wel lustit, [...]“

新高ドイツ語の翻訳では以下のようなになる。

20

„[...] Doch kannst du nun leicht, wenn dir deine Kraft dazu reicht,
von einem so alten Mann die rüstung gewinnen,
die Siegesbeute erlangen, wenn du irgendein Recht dazu hast.“
„Der sei doch nun der Feigste“, sprach Hildebrand,
„der Ostleute,
25 der dir jetzt [noch] den Kampf verweigere, [...]“
(Hildebrandslied. In: Mettke 1979: 82-83)

30

「しかし この勇敢な男から 楽々と
鎧を奪うもできるのだ お前の力が足るなら
打ち取り奪え お前に権利があるならば！」
ヒルデブランドが つぶやいた、「東方の卑怯者の見本だ
もしともに戦うのを 拒む奴は²⁵

一つ目の文頭の *doch* は命題のレベルで明らかに逆説を示しているので *dennnoch*, *trotzdem* の意味で使われる副詞であると考えられる。対して二つ目の *doch* は文の中域に存在し、言葉で明確に表現されていないが反対の意見を持っていることを示し、また同時に誤解や懸念を一掃する働きがある。この発話は、息子との戦いを避けようとしていたヒルデブランドが息子との戦いを決意した際のもので、この *doch* は話し手の内なる葛藤を示す働きを持っており、それまでの期待（＝息子との戦いを避ける）と反対の立場（＝息子と戦う）を取ると伝えているのである。²⁶日本語訳でも一つ目の *doch* は「しかし」と訳されているが、二つ目の *doch* は明確な言葉で訳されていないことから、二つ目の *doch* が心態詞であるという主張は正しいと思われる。

また、Molnár は中高ドイツ語における心態詞 *doch* の研究の中で、Hentschel が示した文タイプのほかに因果関係の副文での使用例も見つけた。

6) *so enwaere in niht also guot*

*so daz si irs wol gunden,
wan si doch niht enkunden
ir niemer werden ane baz.*
(Hartmann von Aue [1987]: 28)

Es wäre das Beste, sie gönnten's ihr, weil sie doch ihr Kind nie herrlicher verlören.
(Neuhochdeutsche Übersetzung in W. Grimms Formulierung, ehd. S. 58)

「そうとなれば、快く許してやるのが一番よかろう、どうせ娘を死なせるからには、そうするに越したことはない。」²⁷

次に Molnár は、以下の2つの資料を用いて、初期新高ドイツ語における心態詞 *doch* について調べた。

A) *Die Reformation im zeitgenössischen Dialog. 12 Texte aus den Jahren 1520-1525.* Bearb. v. W. Link. Berlin, 1968 (im Weiteren: RD).

5 B) Reichmann & K. P. Wegera: *Frühneuhochdeutsches Lesebuch.* Tübingen, 1988.

Aの資料で見られた *doch* の使用例を品詞別に分類すると、心態詞 89 例、副詞 36 例、接続詞 8 例であり、返答詞としての使用は見られなかった。

10 また B の資料は A の資料に比べより広い 14 世紀中ごろから 17 世紀中ごろまでの様々な種類の文章を含んでいるが、この資料においても心態詞の使用頻度が一番高く、返答詞としての使用は見られないという結果となった。さらに Molnár は心態詞 *doch* の使用例を以下の文タイプに分類した。

15 (a)定動詞が文頭にくる平叙文

この文タイプで使用される *doch* は、Reichmann & Wegera の *Frühneuhochdeutsche Grammatik* によると、初期新高ドイツ語においては平叙文のバリエーションの一つであり、強調の用法で用いられる。この文タイプの使用例は定動詞が二番目に来る平叙文よりも多く見られた。

20

(b)定動詞が二番目にくる平叙文

(c)平叙文形式の感嘆文

(d)疑問詞を伴う疑問文

(e)要求文

25 (f)願望文における *doch* の使用は上記の 2 つのコーパスでは見られなかったが、Paul & Henne(1992)でその使用が証明されている。

(g)因果関係の副文、目的を表す副文、関係文といった従属文

30 ここで Molnár は(f)の文タイプの使用例が見つけれなかったのは、願望文における心態詞 *doch* の使用は *doch* の文法化の高いレベルに位置づけられ、初期新高ドイツ語の時代にはまだそこまで *doch* 文法化が進んでおらず、ごく稀にしか使用されなかったからであると考えられる。なぜならば、

願望文における **doch** は条件文と願望文を区別するためだけのシグナルであり、**doch** が本来もつ逆接の意味は極めて薄れているからである。意味の希薄化は文法化の典型的な随伴現象であり、文法化が進むにつれその語が持つ本来の意味も薄れていくのである。要求文における **doch** には逆接の意味がほとんど含まれておらず、その使用の根拠とは考え難い。この **doch** が **bloß** や **nur** に置き換え可能なのも意味の希薄化によるためであると Molnár は主張する。²⁸

また Molnár は、(g)の譲歩文で用いられる **doch** に対しても、(f)と同様に、条件文と譲歩文を区別するための形式的なものであり、**doch** の意味は含まれていないと考える。しかしこの **doch** はおそらく、古高ドイツ語や中高ドイツ語において既に使用されていた、**obwohl**(にもかかわらず)という意味の接続詞の **doch** に由来するのである。²⁹

初期新高ドイツ語における **doch** は古高ドイツ語や中高ドイツ語に比べてさらに多くの文タイプで用いられるようになった。心態詞は特定の文タイプでのみ使用されるという特徴があるのにもかかわらず、決定疑問文以外のほとんどの文で **doch** が使用されるというのは心態詞 **doch** の特徴であると言える。ではなぜ決定疑問文においてのみ **doch** が使用されないのだろうか。それに対して Molnár は形式的な観点と意味的な観点の2つからその理由を考える。

まず形式的な観点では決定疑問文において **doch** を使用してしまうと、定動詞が文頭にくる平叙文(a)との区別がつかなくなってしまうため、決定疑問文において **doch** が使われるようにならなかったと Molnár は考える。心態詞 **doch** が用いられる文タイプのうち、定動詞が文頭にくる文タイプは、非現実的な願望文(f)、命令文(e)、定動詞が文頭に來る平叙文(a)の3つである。このうち(f)では動詞は接続法で用いられ、(e)では命令法で用いられる。対して(a)では決定疑問文と同様に動詞は直説法で使用される。願望文や譲歩文の **doch** が条件文と区別するために用いられているが、決定疑問文での **doch** の使用は文の混同を避けるために認められていないのである。³⁰

次に意味的な観点から考えると、話し手は可能な2つの状況から、どちらが当てはまるのかを尋ねるといふ決定疑問文の性質上、逆接の意味をもつ **doch** を用いることは出来ないと Molnár は考えた。例えば **doch** を伴

った平叙文形式の疑問文、いわゆる確認のための疑問文では、話し手は相手に肯定の返事を期待してる。³¹ しかし決定疑問文においては、話し手は聞き手の返事に関して何の想定もしていないために **doch** を用いることが出来ないのである。³²

5 また **Molnár** は初期新高ドイツ語において返答詞としての **doch** の使用が見られなかったことについても触れている。返答詞としての **doch** の使用が見られるのは 18 世紀が最初である。これは文法化の歴史において異例である。たとえば **ja** では文の中域での **ja** の使用が見られるのは初期新高ドイツ語になってからであるのに対して、文頭での **ja** の使用は古高ドイツ語の時代から見られる。それはつまり、心態詞 **ja** は返答詞 **ja** から文法化したということである。返答詞 **doch** はアクセントをもち、文頭で用いられ、**doch** のもつ本来の意味機能をしっかりと持っているにもかかわらず、心態詞としての **doch** の使用よりもだいぶ遅れてその使用が見られるのである。つまり **doch** においては **ja** のような一直線的な文法化の流れを考えると出来ないのである。**Molnár** は、おそらく副詞あるいは接続詞の **doch** から心態詞 **doch** が発生したのとはまた違った流れで、副詞の **doch** から返答詞の **doch** が文法化されたと考える。³³

このように、心態詞 **doch** の文法化の歴史は心態詞 **ja** とは全く違っている。まず心態詞の重要な特徴として文の中域での出現が挙げられるにも関わらず、枠構造が成立する後期中高ドイツ語あるいは初期新高ドイツ語以前の古高ドイツ語の時代からその使用が見られる。さらに、心態詞 **ja** が返答詞 **ja** から文法化したのに対し、返答詞 **doch** は心態詞 **doch** より後の時代からしかその使用が見られない。つまり、副詞あるいは接続詞の **doch** から心態詞の **doch** が文法化したのとはまた違うルートで副詞あるいは接続詞の **doch** から返答詞の **doch** が文法化されたのである。

第二章 ドイツ語副詞辞典の考察

岩崎の『ドイツ語副詞辞典』は心態詞がもつニュアンスを詳しく記載しており、また例文もたくさん載っているので心態詞の理解にとっても役に立つ。実際私も心態詞のニュアンスを調べるときは真っ先に岩崎の『ドイツ語副詞辞典』を引く。『ドイツ語副詞辞典』には文の形式やアクセントの有

無によって用法が分けられており、特定の訳語は載っていないが心態詞が表す話し手の心情が説明されている。以下心態詞 ja と doch についてそれぞれ見ていくが例文とその訳は岩崎のものに従う。

5 第一節 心態詞 ja

第一章で見たように、心態詞 ja は文の前域で用いられる ja と時の副詞 ie から生じており、その過程で時の副詞 ie が持つ意味だけが欠落したものである。そこで、ja のすべての用法に共通する本来の意味機能は「肯定」であると仮定し、岩崎の『ドイツ語副詞辞典』に記述されている心態詞 ja の用法のすべてを「肯定」で説明できるか検証してみる。肯定とはその通りであると認めること、また積極的にその意義を認めることである。心態詞は発話全体にかかる³⁴ので、発話命題を肯定するということから出発し、それぞれの用法がどのように発生したのかを考えていく。『ドイツ語副詞辞典』に記述されている心態詞 ja の機能は以下の8つである。

- ① 要求文などに用いられ、要求の実現を強く望む話し手の気持ちを反映して。文中のアクセントあり。
- ② 先行する否定を含む発話を受けて、その否定を打ち消して強く肯定しようとする、話し手の気持ちを反映して。文中のアクセントあり
- ③ auch に伴って、決定疑問文に用いられ、その疑問文の陳述内容が事実であってほしいという、話し手の気持ちを反映して。文中のアクセントあり
- ④ 平叙文に用いられ、人・事物などに関して、その場で確認したことの意外さについての話し手の驚きを反映して。文中のアクセントなし
- ⑤ 平叙文に用いられ、陳述内容が、聞き手と共通の既知の事柄である、あるいは自明の事実であるという、話し手の判断を示して。文中のアクセントなし
- ⑥ 平叙文に用いられ、陳述内容を留保付きで一応は認めるという、話し手の気持ちを反映して。後続する aber, doch などと対応することが多い。文中のアクセントなし
- ⑦ 平叙文形式の決定疑問文に用いられ、聞き手の〈肯定〉を予期ないし

期待する、話し手の気持ちを反映して。文中のアクセントなし

- ⑧ 条件文に用いられ、その条件が実現する可能性はあまりないだろうという、話し手の判断を反映して。文中のアクセントなし

(岩崎 『ドイツ語副詞辞典』)

5

①では ja は発話内容を正しいこととして認める (= 肯定する) ことでその要求の正当性を示し、その結果、話し手の要求は当然のことなのだから聞き手はそれを実行しなさい、というニュアンスになると考えられる。以下、『ドイツ語副詞辞典』からいくつか例文を取り上げて考えてみる。

10

- 1) **Seien Sie ja vorsichtig bei diesen Glatteis!**

路面が凍結しているから、くれぐれも用心してください。

話し手は路面が凍結しているという事実があり、そのため用心することは当然であり自分の要求は正当である、と ja によって表現している。

15

- 2) **Vera, daß Sie mich ja von allem unterrichten, was hier im Hause geschieht.**

ヴェーラ、ここの家の中で起こることは、なんでもすべて、私に報告するんだよ。

20

ここではおそらくこの話し手はこの家の家主であり、家の中で起こることは全て知っておく権利がある。だから自分にすべて報告するのも当然である、というニュアンスである。

25

②の否定を打ち消して強く肯定するという ja の用法であるが、本来否定を打ち消して肯定する場合は doch が使われるはずである。なぜ ja が用いられるのだろうか。

- 30 3) **Herr Naumann ist noch nicht angekommen. – Herr Naumann ist ja angekommen.**

ナウマンさんはまだ到着していませんが—ナウマンさん、もう到着し

ていますよ。

そこでドイツ語母語話者に以下の例文 4)について、この文脈で **ja** を用いるのは普通なのか、またこの **ja** を **doch** にするとニュアンスに変化があるのかを尋ねてみた。結果は、この文脈で **ja** を用いるのは間違いではないが、あまり自然ではなく、**doch** の方がこの文脈では合っているという。ただ **ja** と **doch** ではニュアンスに違いがあり、**ja** では「落ち着いて」という話し手の気持ちが、**doch** では「何を言っているんだ」という少し反発するような気持ちが感じられるという。また **ja** と **doch** には、話し手が自分と相手の間に共通の知識基盤が存在するという前提のもとに使用するのが **ja** であり、相手はその前提を無視していることに抗議したり、相手にその前提がないことを危惧する場合に **doch** を使うという違いがある。³⁵ここではおそらく、話し手は聞き手に抗議したり、共通の知識基盤がないことを危惧したりしているわけではなく、ただ単に、目の前の事実を肯定し強調しているだけだろう。そして否定の打ち消しは文脈上そうなたただけであり、心態詞 **ja** に備わっている機能ではないと思われる。

③は心態詞 **auch** との共起である。この **auch** は『ドイツ語副詞辞典』(76 頁)で、「決定疑問文に用いられ、陳述内容が事実であるかどうかを確かめたいという、話し手の気持ちを反映して。文中のアクセントなし」と説明されている。**auch** だけではあくまで陳述内容が事実かどうかは話し手にとって確かでなく、それを確かめたいという気持ちしか表さない。しかし **ja** を用いることで陳述内容が肯定され、それが事実であるべきであり、聞き手に対してもそうだろう、と陳述内容に同意を求めながら事実を肯定する話し手の気持ちが追加される。そしてこれはアクセントが置かれるために、文脈によっては脅しのニュアンスを含むこともできる。

4) Haben Sie auch ja den Schlüssel nicht vergessen?

鍵は、忘れずに持ってきたでしょうね？

30

ja が無い場合、つまり心態詞 **auch** のみの場合は、話し手は鍵を忘れていないか知りたいだけなので「鍵は、忘れずに持ってきましたか？」³⁶と

いう程度の訳になると思われる。しかし ja によって鍵を忘れずに持ってきたという陳述内容を肯定することで陳述内容こそが事実であるべきであり、また ja にアクセントを置くことで「当然、持ってきたらう？ 忘れたなんて言わせないぞ」という脅しのニュアンスが暗に含まれてくるのである。

5

④の用法は話し手がある場で確認した事実に対する驚きを表すとあるが、この「驚き」は ja 自体に含まれるものではないと考える。この ja はあくまで、話し手が事前に想定していた事態、あるいは一般的にそうであることが当然な事態や状況に反して、発話内容こそが事実であると示すためのシグナルであり、現実には起きた事を肯定する過程で、事前の想定と現実には起きた事との間にある差に対する驚きが生じ、それが発話に表れているのである。

15 5) Was ist mit dir? Du bist ja heute so still.

きみ、どうしたんだい？ きょうは、ばかにおとなしいじゃないか

おそらく聞き手は普段はおしゃべりなのだろう。そのため話し手は今日も聞き手がうるさいだろうと思っていたが、実際はおとなしかったので ja によって事実を肯定しているのである。そして普段はうるさいのに今日はおとなしいという想定と現実との差から驚きのニュアンスが生まれるのである。

25 6) „O, da ist ja der Vater! Hast du uns aufgesucht und gewußt, daß wir hier sind?“ rief die Tochter erfreuten Herzens. „Woher sollte ich es wissen? Ich komme ganz zufällig daher! [...]“

「あら、お父さんだわ。私たちが訪ねていらっしたの？ 私たちがここにいること、ご存知だったの？」と、娘が大喜びで叫んだ。「知っているわけないだろう。まったく偶然にここへ来たんだよ。[...]」

30 本来父親はここではない他のところにいるはずであり、娘は父親がここにいるとは思っていなかった。しかし実際は父親がいた。そのため父親がそこにいるという発話内容こそが事実であると ja で示しているのであり、

事前に想定していたことと現実との差から生まれる驚きを話者は表現している。そして読者は ja によってそれを読み取ることができる。

5 またこの ja は『ドイツ語副詞辞典』(693 頁)で「* 2 この ja は、ある
＜事実＞についての話し手の驚きの気持ちを示すもので、事実についてで
はなく、＜程度＞や＜様態＞についての驚きは、aber、vielleicht などによ
って示される」とあり、これについては Helbig(1988)でも以下のように述
べられている。³⁷

10 „ja₂ bringt das Erstaunen des Sprechers über das Daß des
entsprechenden Sachverhalts zum Ausdruck, während aber₁ und
vielleicht₁ ein Staunen über das Wie des betreffenden Sachverhalts
signalisieren:“

15 aber₁ や vielleicht₁ が発話内容の程度(=Wie)に対する驚きを表すのに対
して、ja₂ は発話内容がそうであること(=Daß)についての話し手の驚きを
表現する。³⁸

つまり、5)の例文では、「いつもおとなしいけれど今日は一段とおとなしい」
と驚いているわけではなく、「いつもはおとなしくないのに今日はおとなし
い」という現在の状況に対して驚いているのである。以上のことから、
20 ja がもつ本来の意味機能が「肯定」、つまり事実がそうであると認めると
いう機能であることが伺える。

25 ⑤の用法も発話内容を肯定していることに変わりはなく、話し手は ja を
用いて発話内容が事実であると示しているのである。そして発話内容は事
実であり、それは当然、聞き手にとってもそうであろう、あるいは共通の
既知の事柄であるか、自明の事実であるだろうという話し手の判断に繋が
るのである。

7) Meine Frau stammt, wie Sie ja wissen, aus Schlesien.

30 私の妻は、あなたも御存知のとおり、シュレーズィエンの出身です。

この ja は「あなたが知っていること、それは事実ですよ。」というニュ

アンスを表現するために用いられている。

8) Warum fragst du? Du weißt es ja.

なぜ聞くんだ？君だって知っているじゃないか

5

この翻訳は少し *doch* のような翻訳になっていると思われる。つまり知っているにも関わらず尋ねてくる聞き手に反論するような訳になっているのである。しかしここで用いられているのはあくまで心態詞 *ja* であって *doch* ではない。*ja* と *doch* のニュアンスの違いを考えると、ここでの訳は

10 「なぜ聞くんだ？君が知っている通りだよ」くらいのニュアンスが適していると思われる。³⁹

またこの *ja* は、『ドイツ語副詞辞典』(694 頁)で「しばしば聞き手の予備知識を前提とした<理由づけ><反論>などにも用いられる」と記述されている。これは筒井(2007)でも指摘されるように、文脈の中であくまで副

15 次的にこれらの意味が加わるのであり、*ja* 自体がもつ本来の機能ではないと思われる。⁴⁰ 以下筒井(2007)で挙げられている例文を引用する。なお訳も筒井に従う。

a) Die Prüfung ist ja bald vorüber. 試験はもうすぐ終わるね

20 b) Er wird ja nächste Woche operiert. 彼は来週手術を受けますね

a') Fahren wir übernächste Woche nach Kyoto! Die Prüfung ist ja bald vorüber.

再来週、京都に行こうよ。もうすぐ試験が終わるからね

25 b') Er wird ja nächste Woche operiert. Er kann bestimmt nicht am nächsten Spiel teilnehmen.

彼は来週手術を受けますからね。彼はきっと次の試合には出られません

30 このように、一文だけでは話し手と聞き手の間の共有知識を確認するだけであっても、先行あるいは後続する文をふまえれば、それぞれの文が前後の文の論拠となるのである。よって、理由付けや反論といった機能はあく

まで文脈の中で副次的に加わるものであり、ここでの **ja** がもつ機能は共有している知識の確認であると言える。

⑥の用法についても **ja** は発話内容を肯定し認めるだけであり、「留保付きで」という部分は後続の **aber** や **doch** によるものであると思われる。しかし『ドイツ語副詞辞典』には 9) のように、後続する **aber** あるいは **doch** を伴った文章が省略されたものが記載されていた。この場合、文の形式だけで言えば、つまり平叙文に用いられるアクセントの無い心態詞 **ja** という点では⑤の用法と混同されるように思われる。そして⑤の用法か⑥の用法か判断するには文脈に頼るしかないように思われる。そこでこの文を⑤の用法として読むことは可能なのか、また可能だとしたら⑤の用法か⑥の用法かどのように判断するのかドイツ人の友人に聞いてみた。

9) Sie mag ja recht haben.

15 彼女の言い分は、正しいかもしれないけれど

結果は、この文章では話法の助動詞 **mögen** が用いられているため「かもしれない」というニュアンスが読み取れるのだという。しかしこれが例えば、**Sie hat ja Recht.** という文章であれば目的語にアクセントが置かれると⑤の用法に、動詞にアクセントが置かれると⑥の用法になるそうである。

⑦の用法は③の用法と少し似ているように思われる。というのも、ここでの **ja** もまた、発話内容を肯定することでそれが事実であるはずだという話し手の判断を表しているからである。違うところはアクセントの有無と用いられる文タイプである。ここではアクセントによる強調がないために脅しのニュアンスが出ず、あくまで発話内容は事実であり、それは聞き手にとってもそうであるのだから、当然肯定の返事をしますよね、というニュアンスになるのである。また平叙文形式の決定疑問文に用いられるという所にも、自分の考えが正しく相手もそうであると思いつつも一応確認してみる（＝肯定の返事を期待して）というニュアンスが表れている。

10) Sie kommen ja mit?

あなたも、いっしょに行かれるんでしょう？

11) Du bist ja wohl verrückt?

きみは、おおかた気でも狂ったんだろう？

5 ここでも ja は「あなたも一緒に行く」「君は気が狂った」という発話内容を肯定することでそれが当然の事実であり、「あなたもそう思うでしょう？」という話し手の気持ち（＝肯定の返事を期待）を反映しているのである。

10 ⑧の用法はこれまでの7つの用法と比べて明らかに異なっているように思われる。これまでは発話内容を肯定することで、それが事実であると示し、そこからそれぞれの用法へと発展していた。これまでの用法がプラスなものだとすれば、この⑧の用法はマイナス的である。本来の意味機能が「肯定」である ja を用いているにも関わらず、なぜ可能性はあまりないという否定的なニュアンスになるのだろうか。『ドイツ語副詞辞典』に記載されている以下の二つの例文についてドイツ語母語話者にこの解釈が正しいかどうか聞いてみた。

12) Wenn der Vater es ja erfahren sollte, wird sie Sache sehr unangenehm.

20

万一おやじに知れたら、まことにまずいことになる

13) Wir wollen nicht mehr auf ihn warten. Falls er ja kommen sollte, sag ihm Bescheid, wohin wir gegangen sind.

25

これ以上彼を待つのは、やめにしよう。もし彼が来たら、私たちの行く先を教えてやってくれ

母語話者によると、この文章に ja を用いるのは文としておかしいということであった。そもそも ja は wenn や falls を用いた仮定の文章には合わないのだという。これは ja のもつ肯定という意味機能を考えると当然であろう。そしてこの ja は、おそらく je の間違いではないかという結論に至った。je であれば文としておかしい点は無いらしい、可能性が低いという説明も

理解できるという。ただし、13)の文章では、文としてはおかしくないし意味も通るが、あまりこのような言い方はしないということであった。『ドイツ語副詞辞典』には上記の二つの例文しか載っていなかったのだが、そのどちらも **je** であれば理解できるということであった。これが単なる誤字なのか、心態詞 **ja** が中高ドイツ語における文前域の **ja** と時制の副詞 **je** との混合によって表れたということに関わりがあるのかは今後調べていく必要があるが、ここではひとまず、この文章から可能性の低さを読み取ることが出来ないし、そもそも **ja** を用いることが文として成立しないということを指摘するだけに留める。

10

第二節 心態詞 doch

次に心態詞 **doch** についての記述を見ていく。まず **doch** がもつさまざまな用法に共通するような意味機能については、関口(1994)ですでに述べられている。⁴¹ この中で関口は **doch** のもつ否定の肯定という機能を「三つの段階を駆とする二つの運動」と言い換え、日本語の「やっぱり」がそれに当てはまると述べる。関口は **Es hat doch geschneit**. 「やっぱり降りましたね」⁴² という例文を用いて **doch** について説明した。

20 まずこの発話は、今年の冬はなかなか雪が降らなかったが、二、三日前に急に降り出した、という状況を想定したものである。そこで関口は以下の三段階で「やっぱり」を説明する。

[第一段階＝肯定] 元來雪は毎年降るとしたものである。(きまつた話)

25 [第二段階＝否定の動き] ところが今年は一よつとすると降らずに終わるのではあるまいか？

[第三段階＝肯定への逆戻り] いや、『やっぱり』降った。(『さすが』は冬だ。)

30 この話し手の三段階の心の動きこそが **doch** の本質であると関口は述べる。しかしこの分析は副詞の場合の **doch** についてのみ考えたものであり、他の用法については今後考えていく必要があるが、その際も、副詞の **doch** が

持つ「やっぱり」という機能を出発点として考えていかなければならないと指摘する。

次に佐藤(1995)は、Helbig の doch の分類と例文を用いて、上記の「三つの段階を駅とする二つの運動」が doch の本質であるという関口の主張が心態詞にも当てはまることを以下のように証明した。⁴³

doch₁ : Wir wollten doch heute abend ins Theater gehen.

今晚、芝居に行くんだっただしょ。

[第一段階 = 肯定] 今晚は芝居に行くつもりであった。

10 [第二段階 = 否定の動き] それなのにあなたは芝居のことを一言も口にしない。そういうつもりではなかった? 約束しなかった?

[第三段階 = 肯定への逆戻り] いいえ、やっぱり行くつもりだった。約束した。

結論: 「三つの段階を駅とする二つの運動」が認められる。

15 doch₂ : Gib mir mein Buch zurück!—Ich habe es dir doch gestern schon zurückgegeben.

きのう、もう返したじゃないか!

[第一段階 = 肯定] すでに返してある。

20 [第二段階 = 否定の動き] それを「返してくれ!」なんて、まだ返していない?

[第三段階 = 肯定への逆戻り] いいや、やっぱりもう返した。

結論: 「三つの段階を駅とする二つの運動」が認められる。

doch₃ : Komm doch endlich zum Essen!

いい加減でこっちへ来て食べなさい。

25 [第一段階 = 肯定] 食事ができたら、食卓について食べるもの。

[第二段階 = 否定の動き] それなのに、いつまでも何かやっている。来ない?

[第三段階 = 肯定への逆戻り] いいや、やっぱり来る。いい加減に来なさい。

30 結論: 「三つの段階を駅とする二つの運動」が認められる。

doch₄ : Wo waren wir doch stehengeblieben?

どこまでお話ししたんでしたっけ?

[第一段階＝肯定] どこまで話したのか知っている。

[第二段階＝否定の動き] 失念！知らない？

[第三段階＝肯定への逆戻り] いいや、やっぱり知っているはずだ。
ちょっとヒントを言ってくればすぐに思い出します。

5 結論：「三つの段階を駆とする二つの運動」が認められる。

doch₅ : Du hast doch die Wohnung richtig abgeschlossen?

ちゃんとカギを掛けたんだろ？

[第一段階＝肯定] ちゃんとカギを掛けた。

[第二段階＝否定の動き] 君の不安な顔…カギを掛けないで来た？

10 [第三段階＝肯定への逆戻り] いいや、君がそんな馬鹿なことをするわけがない。やっぱり掛けて来た。そうだよ？

結論：「三つの段階を駆とする二つの運動」が認められる。

doch₆ : Das ist doch die Höhe!

こりゃあ、ひどい！

15 [第一段階＝肯定] これはひどい。

[第二段階＝否定の動き] 普通こんなことはあり得ない。何かの間違い？そんなにひどくない？

[第三段階＝肯定への逆戻り] いいや、やっぱりひどい。

結論：「三つの段階を駆とする二つの運動」が認められる。

20 **doch₇ : Hätte er doch den Ratschlag des Arztes befolgt!**

先生の言うことを聞いていればねえ！

[第一段階＝肯定] 先生の言うことを聞かなかった。(現実)

[第二段階＝否定の動き] 聞いた？生きている？(願望)

25 [第三段階＝肯定への逆戻り] いいや、やっぱり聞かなかった。だから死んじゃった！(現実)

結論：「三つの段階を駆とする二つの運動」が認められる。

同時に佐藤は、以下のように接続詞の **doch** には「三つの段階を駆とする二つの運動」が当てはまらぬと指摘する。⁴⁴

30

Sie hatte die Begegnung bis ins kleinste vorausgeplant, doch es sollte alles ganz anders kommen.

彼女はその出会いを微にいり細にいりあらかじめ計画しておいたのだけれども、すべては思惑からまったく外れた結果となってしまった。

[第一段階 = 肯定] ? 計画通りに行かない?

[第二段階 = 否定の動き] 計画通りに行く。

5 [第三段階 = 肯定への逆戻り] ? いいや、やっぱり計画通りに行かない?

結論: 「三つの段階を駆とする二つの運動」を認めることには無理がある。

10 そこで私は「三つの段階を駆とする二つの運動」はあくまで **doch** がもつ本来の意味機能から発展した用法の一つであり、**doch** のすべての用法に共通するような意味機能が他にあるのではないかと考えた。Molnár(2002)で記されているように、**doch** の最も古い用法は副詞あるいは接続詞であり、返答詞としての **doch** が初めて見られるのは 18 世紀になってからである。

15 ⁴⁵そして返答詞は副詞から文法化されたと考えられている。よって前述した関口の、副詞の **doch** を中心に他の用法について考えるべきである、という主張は間違っていない。ただ、その **doch** がもつ本質が「やっぱり」ではなく「逆接」であると私は考える。つまり「やっぱり」もまた、「逆接」から発展した用法の一つであり、**doch** がもつすべての用法に通ずる本来の意味機能は「逆接」なのである。以下、この「逆接」という意味機能を中心として『ドイツ語副詞辞典』における心態詞 **doch** の分類について考えていく。『ドイツ語副詞辞典』における心態詞 **doch** の分類は以下の 10 種類である。

25 ① 平叙文に用いられ、先行する発話や場面を受けて、それに対して反論ないし抗弁しようとする話し手の気持ちを反映して。文中でのアクセントなし

② 平叙文に用いられ、先行する発話や場面を受けて、それに対する話し手の怪訝・不満・不快・釈然としない気持ちなどを反映して。文中のアクセントなし

30 ③ 平叙文に用いられ、先行する発話の内容について、予想される相手の反論を先取りしつつ、それに対する反論の理由を述べようとする話し手の

気持ちを反映して。文中のアクセントなし

- ④ 《雅》定動詞が文頭に置かれた平叙文に用いられ、先行する発話内容についてその理由を説明しようとする話し手の気持ちを反映して。文中でのアクセントなし
- 5 ⑤ 要求文に用いられ、先行する発話や場面を受けての要求の実現を強く求める、話し手の気持ちを反映して。文中でのアクセントなし
- ⑥ 平叙文形式の決定疑問文に用いられ、相手の肯定の返事を期待する話し手の気持ちを反映して。文中でのアクセントなし
- ⑦ 補足疑問文に用いられ、その時点で失念した事柄に関して、自分ほたしかにそれを知っていたはずなのだがという、話し手の気持ちを反映して。
- 10 ⑧ *ja doch, gewiß doch, nein doch, nicht doch* などの形で、肯定あるいは否定を強調しようとする、話し手の気持ちを反映して。文中のアクセントなし
- ⑨ さまざまな形式の感嘆文に用いられ、話し手の驚き・驚嘆・賛嘆、場合によっては不快・怒り、などさまざまの気持ちを反映して。文中のアクセントなし
- 15 ⑩ 接続法Ⅱを用いた条件文形式の願望文に用いられ、実現の見込みのない、あるいは少ない事柄に関して「…であればいい（よかった）のに」という、話し手の愚痴に似た気持ちを反映して。文中のアクセントなし
- 20

(岩崎『ドイツ語副詞辞典』)

①の用法では話し手と聞き手の間にある矛盾を *doch* の「逆接」によって表している。

25

1) *Ich schenke ihm mein volles Vertrauen. – Aber er hat dich doch mehrfach angelogen.*

私は、彼を全面的に信頼している—でも彼は、きみに何度もうそをついたじゃないか

30

ここでは彼に何度もうそをつかれた場合、普通は彼に対する信頼は無くなるはずであると話し手は思っている。にもかかわらず、彼を信頼している

という聞き手に対して反論する話し手の気持ちが表されている。「彼がきみに何度もそをついたことは、きみもわかっているだろう？にもかかわらず彼を信頼しているというのかい？」というニュアンスである。ここでは、話し手は相手の主張と自分の考えの間にある矛盾を **doch** によって示しているのである。

2) Was hast du denn daran auszusetzen? Das Zimmer ist doch schön.

きみは、なにが不満なんだ。この部屋、すばらしいじゃないか

10 この文章では、話し手はその部屋がすばらしく、何の不満もないはずであると判断しており、それにもかかわらず不満げな相手に対して反論する気持ちを **doch** によって表している。「この部屋はきみにとってもすばらしい部屋だろう？にもかかわらず何故不満なんだい？」というニュアンスである。

15

②の用法では先行する発話や場面に対する怪訝・不満・不快・釈然としない気持ちなどを反映してとあるが、これも先行する発話や場面と話し手の考えとの矛盾を **doch** で表しているのであり、話し手の気持ちは文脈を通して聞き手が推測するものであると考えられる。

20

3) Warum lassen sie uns nicht in Frieden? Wir haben doch niemand was getan.

なぜ彼らは、私たちがそっとしておいてくれないのだろうか？私たち、誰にも何もしていないのに

25

ここでは誰にも何もしていないのだから私たちはそっとしておかれるべきであると話し手は思っている。しかし実際は、彼らは私たちがそっとしておいてくれないため、話し手の考えと現実の間にある矛盾から **doch** が用いられている。「彼らは私たちがそっとしておいてくれないが、私たちは何もしていないのだからそれはおかしい」というニュアンスである。

30

ここで注目すべきは、『ドイツ語副詞辞典』(294 ページ)に①の用法と

②の用法の境界は、きわめて流動的であると記されているところである。しかし、①の用法と②の用法の境界ははっきりしていると私には思われる。なぜならば、①の用法はあくまでも相手の主張に対して自分の主張を述べる（＝反論する）だけであるのに対し、②の用法ではその反論に話し手の不快感などの感情が伴っているからである。これは Helbig(1988)でも以下のように明確に述べられている。

doch₁ 平叙文に用いられ、アクセントなし

話し手は doch を用いて、聞き手との共通の知識基盤に訴えかけ、また自身の立場を聞き手に伝える。そして発話内行為的に同意を求める。（その際に簡単な矛盾を排除する。）⁴⁶

doch₂ 平叙文に用いられ、アクセントなし

事前に行われた発話行為に関係し、その発話行為と doch₂ を用いて述べられた発言との間に簡単な矛盾をつくり出す。[中略] 事前に行われた発話行為は批判され、拒絶される。⁴⁷

つまり、相手との間にある矛盾を doch によって示すことでその矛盾を取り払い、同意を求めようとするのが doch₁ であり、矛盾を示すことで相手の主張を拒絶しようとするのが doch₂ なのである。岩崎の①と②の用法の違いはここにあるのではないだろうか。つまり話し手が否定的な気持ち、不快感を持って反論していれば②の用法（＝doch₂）であり、そういった感情を持たずに、あくまで自分の意見を相手に述べるだけであれば①の用法（＝doch₁）となるのではないだろうか。

③の用法では反論の理由を述べるという説明がなされているが、これは doch 自体に備わっている機能ではなく文脈から聞き手が推測するものと思われる。これに関しては山田(2006)でドイツ語母語話者に対するアンケート調査によって検証されており、doch 自体が理由付けの要素を持っているわけではなく、相手への反応の機能の中で、場合によって理由付けととれる意味を持つに過ぎないと述べられている。⁴⁸以下、『ドイツ語副詞辞典』に記載されている例文を見ていく。

4) Sei doch nicht so empfindlich! Das Lachen gilt doch gar nicht dir.

そんなに神経質になるなよ。きみのことを笑ったわけじゃないんだから

5 この文章では、自分が笑われたわけではないにもかかわらず神経質になっている相手に対して「きみは神経質になっているけれども、きみのことを笑ったわけじゃないのだから、そんなにピリピリするなよ」というニュアンスの **doch** である。

また、『ドイツ語副詞辞典』では理由付けの機能に注目し、一つの用法として分類されているが、Helbig では③の用法は **doch₂** でしばしば見られる機能であると述べられている。

doch₂ 発話行為的に拒絶すること [中略] や、非難すること、対立的に非難するというよりは、弁明する (=しかし) ということが重要である。理由付けの機能はしばしば前後の文脈と結びついている。 49

③の用法が反論の理由を述べようとして、とされるのはこのためであろう。つまり、②も③も **doch** の機能としては矛盾を示すことによる相手への批判、相手の主張の拒絶であり、理由付けの機能は文脈の中で副次的に加わるものなのである。

次に④の用法だが、この用法は今ではほとんど見られない昔の用法とされている。第一章の第二節で述べたように、初期新高ドイツ語においては、定動詞が文頭にくる平叙文は平叙文のバリエーションの一つとして存在しており、心態詞 **doch** の使用は定動詞が二番目にくる平叙文よりも頻繁に見られたのである。おそらく、初期新高ドイツ語の時代に存在していた定動詞が文頭にくる平叙文が次第に見られなくなるにつれ、この **doch** の使用も見られなくなったのだろう。以下、例文を見ていく。

5) Sie konnte ihm schlecht die Tür weisen, war er doch ihr Vater.

彼女は、彼を追い出すわけにはゆかなかった。というのも、彼は彼女の父親であったから。

6) Sie war offenbar Französin, blätterte sie doch in einer französischen Zeitung.

5 彼女は、どうやらフランス人らしかった。フランスの新聞をめくっていたからだ。

5)の例文では、彼女は彼を追い出したかった。けれども、彼は彼女の父親であったからできなかった、という逆接から、6)では、「彼女が何人かはわからない。けれどもフランス語の新聞を読んでいるのでフランス人だろう」という逆接から doch が用いられていると思われる。先行する状況を否定しているという点で、この doch も②、③の doch と同じもの(=doch₂)であり、用いられる文体が違うだけであると思われる。

10

⑤は要求文に用いられ、発話内容を強調するとされているが、これこそ関口の「三つの段階を駈とする二つの運動」が有効であると思われる。関口(1994)は doch が肯定を強める機能を持つことを以下のように説明している。⁵⁰

15

「一つの事実を強く肯定すると云つたつて、たゞ「強く」云ふきりではしかたがない。それを一度試みに否定して見て、その否定によつて生ずる無理な點が充分意識されるに及んで、また元の肯定に復歸するといふと、その一見無益な往復によつて、最初の單一なる肯定が今度は堂々たる機構を得て、内面的に鞏固なものとなつて來ます。[中略]これがつまり『肯定』といふ簡単な事をやる際に人間に與へられてゐる謂はば只一つの論理的手管なのだといふ事を意識する必要があります。」

20

25

つまり、話し手は自分の要求を一度否定することによってその正しさを再確認しており、その思考の動きを一言で表しているのが doch なのである。要求の実現を強く望むという機能はこういった流れから生じたと考えられる。

30

7) **Treiben Sie doch ein bißchen Sport!**

すこしスポーツをされたほうがいいですよ

たとえばこの例文では、話し手はスポーツをしてほしいという要求を一度
5 否定した後、やっぱりスポーツはした方がいい、と肯定に帰ってくることで自身の要求を内在的に確かなものとし、その正当性を確認しているのである。

⑥の用法は肯定の返事を期待するというより、自分と相手の間にある前提
10 を確認していると思われる。その結果肯定の返事を期待しているように思われるのである。実際、『ドイツ語副詞辞典』（300 ページ）では注記として、「相手の否定の返事を期待する場合には、**doch nicht**（または他の否定詞）を用いる」と書いてある。このことから、**doch** 自体に含まれる機能は肯定の返事を期待するという機能よりも、自分と相手の間にある前提
15 を確認するという機能であると思われる。

8) „Gehen Sie denn nicht gern ins Gymnasium?“ „Kennen Sie jemand, der gern hineingeht?“ „Sie wollen aber doch studieren?“ „Nun ja, ich will schon.“

20 「あなたは、ギムナージウムに通うのが好きではないのですか?」「好きで入学する人なんて、御存知ですか?」「でもあなたは、大学に進むつもりなんでしょう?」「まあ、それはそうですが」

ここでは聞き手は大学に進むつもりであるという前提があるにも関わらず、
25 聞き手がギムナージウムに通うのが好きでないようなことを言うので、話し手は **doch** を用いてその前提を確認してるのである。「大学に進みたいならば、ギムナージウムに通わなければならない。にもかかわらずあなたは好きでギムナージウムに通っているわけではないと言う。けれども、あなたは大学に進みたいと言っていましたよね?」というニュアンスである。

30

9) **Sie werden doch nicht etwa glauben, daß es Gespenster gibt?**

あなたは、まさか幽霊が存在するなんてこと、信じてはおられないでし

ようね？

ここでは幽霊が存在しないということは、相手との共通の認識であると話し手はおもっているが、相手が幽霊を信じているような様子であったため、
5 その共通の認識を改めて確認しているのである。

⑦の用法は本来知っているはずだけれども思い出せない、という逆接から doch が用いられている。doch を用いることで単に知らないと相手に伝えるだけでなく、本当は知っているが今は思い出せない、という話し手の
10 もどかしさを表現している。

10) Wie hieß doch gleich das Hotel, in dem wir damals übernachtet haben?

あのときぼくたちが泊まったホテル、なんという名前だっけ？

15

ここでは実際に泊まったことがあるのだからホテルの名前を知っているはずである。にもかかわらず思い出せないというもどかしさから doch が用いられている。

20 ⑧の用法は同じ強調という働きでも⑤の用法とは少し違うように思われる。この場合の doch は「私の考えはこうであるにもかかわらず何故あなたはそんなことを言うのだろうか」という少し反論するようなニュアンスが含まれており、それが肯定あるいは否定の強調につながると思われる。

25 11) Sind sie damit einverstanden? — Ja doch, ich bin vollkommen einverstanden.

あなたは、それに同意していただけますか？—もちろん、完全に同意します

30 この例文では、「なぜわざわざ私に同意するか、などと尋ねるのですか？私は当然同意するというのに」といういささか反論のようなニュアンスが doch に含まれており、そのため肯定の強調となるのである。

⑨の用法では話し手の想定と現実との違いから生じる驚きや場合によっては不快感などの感情を表していると思われる。また、この **doch** が表す驚きは発話内容がそのようであること(= **Daß**)に対する驚きであり、発話内容の程度(= **Wie**)に対する驚きではないことは注意しなければならない。

51

12) Was bist du doch für ein Faulpelz!

きみってやつは、なんて怠け者なんだ！

10

13) Ist das Wetter doch herrlich!

じつにすばらしい天気じゃないか！

これはそれぞれ「きみは怠け者じゃないと思っていたけれども、実際はなんて怠け者なんだ！」「いい天気になると思っていなかったけれども、じつにすばらしい天気じゃないか！」というニュアンスである。発話内容の程度(= **Wie**)ではなく、そうであること(= **Daß**)に対する驚きなのは **doch** が否定の肯定という、肯定を含んだ機能を持っているからだと思われる。

⑩の用法は Molnár(2002)で示されているように、条件文と願望文を区別するための形式的な **doch** である。⁵²この **doch** では **doch** がもつ本来の意味機能はほとんど無くなっているとされているが、これもまた逆接の機能から用いられていると考えられる。つまり、現実と願望が逆接の関係にあるのである。

25

14) Ach, hätte ich doch Geld!

ああ、お金があればなあ

15) Bleib ich doch ein Junggeselle!—seufzet Pluto tausendmal—.

独身のままでいればよかったなあ、とプルートは、何千回となく溜め息をつく

この doch はどちらも「(お金が手に入る可能性は低いとわかっているけれども) お金があればなあ」「(自分はもうすでに結婚してしまっており、手遅れだとわかっているけれども) 独身のままでいけばよかったなあ」という逆接であり、叶わないことを分かっているながらも願ってしまう話し手の諦めや愚痴のような気持ちが doch に込められているのである。

このように副詞あるいは接続詞の doch がもつ「逆接」が doch の全ての用法を貫くような本来の意味機能であり、個々の用法がまったく違うように思われる心態詞の用法もすべて「逆接」から出発していると説明することが可能である。そして関口が指摘する「三つの段階を駅とする二つの運動」という doch の機能もあくまで「逆接」から出発した機能の一つであると考えられる。

第三章 ドイツ語教育における心態詞

15

これまで心態詞の歴史や用法について見てきたが、そもそも私が心態詞に興味をもったのは、ドイツ語でのコミュニケーションの場で心態詞がとても頻繁に用いられており、しかも話者の気持ちを表すという、コミュニケーションにおいて私が最も重要だと思っていると言っても過言ではない機能をもち合わせているにもかかわらず、日本でのドイツ語学習の中で心態詞に出会う機会がなかったからである。ダイアログの中の一文として「Komm doch mal!(いい加減こっちに来てよ)」や「Guck mal!(見てみるよ)」などを見かけることはあれど、この doch や mal について詳しい説明はドイツ語の教科書の中では見たことが無かったのである。そこで現在の日本のドイツ語教育において心態詞がどのような位置にあるのか、また「外国語としてのドイツ語」(Deutsch als Fremdsprache 以下 DaF とする)のテキストではどのように心態詞が扱われているのかを概観し、ドイツ語初学者が心態詞を効率的に学ぶにはどうしたらよいか考えていく。

30 第一節 日本での心態詞の扱い

日本で発売されているドイツ語の文法書で心態詞について詳しく述べて

いるものはあまり多くないように思われる。心態詞研究者の多くが参考
している E. Hentschel と H. Weydt の *Handbuch der deutschen*
Grammatik『ハンドブック現代ドイツ文法の解説』では心態詞について詳
5 しく述べられているが、この本は研究者向けであり一般向けではないよ
うに思われる。つまりドイツ語初学者が文法を勉強しようと思った際に手
に取るような気軽さはないのではないかと思うのである。それに対して在
間進の『リファレンス・ドイツ語 ドイツ語文法の「すべて」がわかる』
と鷺巣由美子の『NHK 出版 これならわかるドイツ語文法 入門から上級
10 まで』の二冊の本は書店で販売されているため比較的手に取りやすく、な
おかつ心態詞に関する記述が見られる文法書である。

前者の本では第 5 章形容詞、副詞のうちの第 2 節副詞、5. 疑問副詞、
疑問代名副詞、接続副詞の最後にコラムとして、6 つの心態詞 *auch*、*denn*、
doch、*ja*、*mal*、*schon* のそれぞれの一部の用法について例文付きで説明し
ている。⁵³この 6 つの心態詞は、おそらく日常会話における使用頻度の高
15 さから選ばれたのではないかと思われる。なぜならば、第二節で DaF のテ
キストで心態詞がどのように扱われているかを見ていくのだが、これらの
心態詞は DaF のテキストでも比較的多くの記述が見られたからである。使
用頻度が高いため、最低限学ばなければならない重要な心態詞として記載
したのではないだろうか。

20 また後者の本では、第 23 章話者の判断・心的態度を表す語の中に、3. 心
態詞という形で心態詞について項目が設けられている。⁵⁴まず初めに心態
詞の概要を簡単に述べ、用いられる文のタイプごとに主な心態詞を例文付
きで紹介している。前者の本より多くの心態詞について記述されており、
また文タイプについても触れているのでより心態詞について詳しく知るこ
25 とができると思われる。以下 *ja* と *doch* に関する記述を引用する。

ja [理由づけを表す ; 「だって…じゃないか」]

Du, wir müssen umkehren, es wird ja schon dunkel.

おい、帰らなきゃ、もう暗くなるじゃないか。

30 [抗議を表す]

Du weißt es ja.

そんなこと、君はわかっているじゃないか。

〔驚きを表す；「本当に、実に」〕

Brr, das ist ja eiskalt!

ブルル、こりゃ本当に寒いや！

5 **doch** 〔最初の予想通りであることを表す；「やはり」〕

Du hast es also doch gewusst.

君はやはりそれを知っていたんだ。

〔ある事柄を再確認する形で叙述を強める；「何と云っても」〕

Du bist doch kein Kind mehr.

10 君はもう子供じゃないんだよ。

〔非難などの意味合いを表す〕

Das kannst du doch nicht machen!

それはやってはいけないことなんだよ。

〔命令文で；催促などを表す；「さあ」〕

15 **Komm doch endlich!**

さあ、いいかげんに来いよ！

(在間進『リファレンス・ドイツ語 ドイツ語文法の「すべて」がわかる』)

20 **ja** 平叙文・感嘆文で用いられる

その場で確認したことがらについての驚き

Du bist ja schon da.

おや、もう来てたんだね。

聞き手にも既知のことだという判断を伝え、同意を求める

25 **Ausstellungen mit Impressionisten sind ja immer gut besucht.**

印象派の画家の展覧会はいつも混んでいるからね。

doch 平叙文・感嘆文で用いられる

先行する発話や状況を受けて、それに対する抗弁、怪訝、不満など

30 **Das sind doch gute Neuigkeiten.**

それはいい知らせじゃないか

Das ist doch unmöglich!

そんなこと、ありえない。

Du wolltest doch heute zum Arzt gehen.

今日お医者さんに行くって言ってたじゃない。

5 相手の反論を予測しそれに反対の理由を述べる

Schreib mir nicht alles vor. Ich bin doch kein Kind mehr.

ああしろこうしろって指図しないで。わたしもう子どもじゃないんだから。

10 願望文を表す文で用いられる

切望や悔恨

Wenn dies doch ein Traum wäre!

これが夢だったなら。

15 命令文で用いられる

要求の実現を強く求める気持ち

Hör doch endlich auf zu jammern!

愚痴を言うのはいいかげんにやめて。

20 疑問文で用いられる

平叙文の形の疑問文で、ことがらを再確認する

Du hast doch ein bisschen Zeit, oder?

時間少しはあるんでしょう？

過去時制の補足疑問文で、「知っていたはずだが失念してしまった」

25 ということを聞き手に伝える

Wie war doch Ihr Name?

お名前はなんとおっしゃいましたっけ？

30 (鷺巣由美子の『NHK 出版 これならわかるドイツ語文法 入門から上級まで』)

このように、心態詞は特定の訳語を持たず話し手の心的態度を伝えるためのシグナルのようなものであり、またどの語を心態詞とするか、どのよ

うな用法があるのか明確に決まっていないう点で心態詞を教科書や文法書で取り扱うのは難しいのかもしれない。しかし、前者の本のように、重要と思われる心態詞やその用法を絞って記述することで、ドイツ語初学者も心態詞という品詞の存在を知るきっかけとなり、さらなるドイツ語の上達にも繋がると思われる。

第二節 DaF のテキストにおける心態詞の扱い

次にドイツでは心態詞はどのように扱われているかを見ていく。ドイツ語母語話者にとって心態詞は会話の流れで自然と出てくるものであり、意識して使用していないし、ましてや意識的に学習するものでもない。母語を身につける過程で自然と習得するのであり、心態詞が持つニュアンスも感覚的に理解している。そこで DaF のテキストで心態詞がどのように扱われているかを調べる。

DaF のテキストでも心態詞を扱っているものと扱っていないものがあったり、また心態詞の記述があったとしても、どの語を扱っているか、どのような説明を加えるか、どの文タイプに表れるか、などどの程度記述するかはテキストによって様々であった。ただ一貫して、心態詞が話し手の心気持ちを表すものである、という記述は見られた。以下 ja と doch に注目して見ていく。

まず心態詞 ja に関してであるが、DaF のテキストでは主に Übereinstimmung (意見の一致)、Überraschung (驚き)、Warnung/Drohung (警告、脅し)という簡潔な説明と共に3種類の ja の用法が見られた。⁵⁵また一つのテキストでは他の心態詞との共起形として ja と aber、ja と auch の2種類が見られたが、多くは心態詞単体での使用について記述されていた。ここでは ja 単体での使用に限定して見ていく。以下テキストから引用するが、日本語訳は筆者によるものとする。

A) Übereinstimmung (意見の一致)

30

- 1) Peter macht morgen ein Fest. — Ich weiß, er hat ja morgen Geburtstag.

ペーターが明日パーティーをするよ。一知ってるよ。彼は明日誕生日だからね。⁵⁶

B) Überraschung (驚き)

5

2) Was, Uwe, du bist ja schon da! — Unser Turnlehrer ist krank.

あれ、ウーヴェ、君もういるじゃないか！—私たちの体操の先生が病
気なんだ。⁵⁷

10 C) Warnung/Drohung (警告、脅し)

3) Passen Sie ja auf, sonst passiert was!

気をつけなさいよ。さもなければ何か起きますよ！⁵⁸

15 4) Lass dich hier ja nicht wieder blicken!

二度とここに姿を見せるなよ！⁵⁹

Gerhard Helbig の *Lexikon deutscher Partikeln* では心態詞 ja の用法
を ja₁ から ja₄ までの 4 つに分類しているが、上記の 3 つの用法はそれぞ
20 れ ja₁ から ja₃ までの用法と一致しており、おそらく Helbig の心態詞の分
類を基準としていると思われる。⁶⁰ またこの 3 種類の用法はどれも記述頻
度に差はなかった。用法が 3 つしかないというのは『ドイツ語副詞辞典』
で 8 つの用法が挙げられているのに比べてかなり少ないという印象を受け
る。

25

次に心態詞 doch であるが、DaF のテキストで見られた doch の用法は圧
倒的に Aufforderung(要求、誘い)が多かった。その際に doch 単体での使
用もあるが、多くは mal や endlich など、他の心態詞を伴ったものであっ
た。

30

1) Machen Sie doch eine Pause.⁶¹

休憩したらどうだい。

2) Komm doch heute Abend mal vorbei, wenn du Lust hast.⁶²

もしよかったら、今晚ちょっと寄って来ないかい。

5 3) Gehen Sie doch endlich hier weg!⁶³

いい加減ここから出て行ってちょうだい！

しかし、その他の用法はどれも意味の説明がバラバラで、ja のように一言
10 で簡単にまとめることができなかった。以下例文を引用するが、括弧内は
それぞれの例文に対する説明である。

4) Er ist doch ein Mensch aus Fleisch und Blut.

(Verstärkung oder Zweifel 強調あるいは疑念)⁶⁴

やはり彼も人の子だ。

15

5) Sie müssen das wissen, Sie sind Lehrerin. - Ich bin doch keine
Lehrerin!

(Widerspruch 矛盾)⁶⁵

20 あなたは教師であるということを自覚しなければなりません。一私は
教師なんかではありません！

6) Frag mal Gudrun, die hat doch Physik studiert.

(Der Sprecher nennt einen Grund für etwas. 話し手は理由を述べ
る)⁶⁶

25 グードルーンに聞いてみたらどうだい。彼女は物理学を専攻したのだから。

7) Ihr kommt doch heute Abend?

(Der Sprecher erwartet etwas. 話し手は何かしらを期待している)⁶⁷

30 あなたたちは今晚来るんでしょう？

8) Da ist er (ja) doch schon da!

(Betonte Überraschung 驚きの強調)⁶⁸

彼はもう来ているじゃないか！

9) Schau mal, das Sofa ist doch toll!

5 (stärker/schwächer machen 調子を強める、あるいは弱める)⁶⁹

ちょっと見て。このソファ本当にすてき！

10) Wär ich doch bloß daheim geblieben!

(Verstärkung des Wunschs 願望の強調)⁷⁰

10 自宅に居られたらなあ！

11) Wenn ich doch nur wüsste, was ich machen soll.

(Irreale Wünsche 非現実的な願望)⁷¹

自分が何をすべきか分かってさえいたらなあ。

15

このように、同じ文タイプに用いられている **doch** でもその用法の説明にはばらつきがあった。そこで心態詞 **ja** でもそうであったように、**doch** でも Helbig の分類に従っているのではないかと考えた。以下に Helbig の **doch** の分類とその例文を引用する。**doch**₁ と **doch**₂ に関しては、第二章で
20 すでに紹介しているが、ここでももう一度引用する。

doch₁ 平叙文に用いられ、アクセントなし

話し手は **doch** を用いて、聞き手との共通の知識基盤に訴えかけ、
また自身の立場を聞き手に伝える。そして発話内行為的に同意を求
25 める。(その際に簡単な矛盾を排除する。)⁷²

Diesen Plan haben wir doch neulich schon besprochen. (Das
mußt du zugeben.)

私たちは先日すでにこの計画について話しましたよね。(聞き手は
これに同意しなければならない)

30

doch₂ 平叙文に用いられ、アクセントなし

事前に行われた発話行為に関係し、その発話行為と **doch**₂ を用いて

述べられた発言との間に簡単な矛盾をつくり出す。[中略]事前に行われた発話は批判され、拒絶される。理由付けの機能はしばしば前後の文脈と結びついて表れる。⁷³

Das können wir doch so nicht machen.

5 このことをあんなふうにするなど、私たちにはできません。

A: Wir müssen über die Straße gehen.

B: Jetzt nicht, die Ampel zeigt doch „rot“.

A: 道路を横切らないと

B: 今はだめだよ。信号が赤だから。

10

doch₃ 要求文に用いられ、アクセントなし

要求の強調やそれによる変化を望んでいることを表す。切実さ、性急さ、不愉快、非難といった話し手の気持ちを表す。(特に **endlich** や **immer** との併用で) または、落ち着いた、丁寧な、なにげないと言ったニュアンスを表す。(**bitte** や **mal** と の併用で) ⁷⁴

15

Sei doch nicht so traurig!

そんなに悲しむなよ!

Komm doch endlich zum Essen!

いい加減こっちに来て食べろよ!

20

Sprechen Sie doch mal mit dem Arzt!

ちょっとお医者さんと話をしたら!

doch₄ 補足疑問文に用いられ、アクセントなし

話し手は、その質問によって、すでに知っているはずだが過ぎ去ったもの、忘れ去られたものを思い出そうとし、相手から(再び)それを知ろうとする。⁷⁵

25

Wo arbeitest du doch? (Du hast es mir zwar gesagt, ich habe es aber vergessen.)

きみはどこで働いていたっけ?(君に教えてもらったけど、忘れてしまったんだ。)

30

doch₅ 決定疑問文の発音であるが平叙文形式の文に用いられ、アクセント

なし

話し手はこの疑問文の形式を取ることで、聞き手の返事によって心配や疑いを晴らしたい。(肯定の返事を期待し、より好む) 76

Das schaffst du doch bis morgen? (Ich nehme es an und möchte mich noch einmal vergewissern.)

5

きみは明日までにそれをやり遂げるんだろ？(私はそう思っており、もう一度それを確認したい。)

[この場合 *schaffst* にアクセントが置かれる。もし *doch* にアクセントが置かれた場合は、その *doch* は副詞として解釈される。]

10

*doch*₆ 定動詞が二番目にくる感嘆文、つまり文頭に疑問詞がくる(補足疑問文の形式)あるいは文頭の疑問詞がない文に用いられ、アクセントなし

15

相手との共通の知識基盤を引き合いに出さない(*doch*₁や*doch*₄のように)。そうではなく、話し手の期待と述べられた事実との間にある矛盾を示し、同時に話し手自身の知識を訂正する。しばしば驚きや怒りなどに結びつく。77

Wie klug er doch ist!

20

彼はなんて賢いんだ!

Du schnárchst doch! (Ich habe es nicht geahnt.)

君はなんて大きないびきをかくんだ!(私はそれを予想していなかった。)

[*doch*₅同様、アクセントの位地で*doch*の解釈が変わる。]

25

*doch*₇ 願望文(文頭あるいは非文頭に用いられる条件文の独立した形式)に用いられ、アクセントなし

話し手の要求に対する切実な気持ちの表れ。発話時点ではその願望は満たされておらず、将来的に満たされる。(そのため接続法過去 *Konjunktiv Prätertum* が用いられる)もしくは非現実的で満たされることがない願望を表す。(そのため接続法過去完了 *Konjunktiv Plusquamperfekt* が用いられる) 願望と現実の

30

間にある矛盾を表す。78

Käme der Brief doch bald! (Ich wünsche es mir dringend.)

早く手紙が届いたらなあ！（私はそれを切実に願っている。）

Hätte er doch den Ratschlag des Arztes befolgt!

5 彼が医者 of 忠告に従っていたらなあ！

[上記の説明では接続法過去あるいは接続法過去完了を用いるとあるが、例文は全て接続法第2式現在あるいは接続法第2式過去であった。]

10 テキストで見られた **doch** の使用例は、大半は **Helbig** の **doch** に従って振り分けることができた。最初に述べた 1) から 3) の例文は **doch₃** に当てはまり、5) の例文は **doch₂** に当てはまる。さらに、例文 7) は **doch₅** に、8) と 9) は **doch₆** に、10) と 11) は **doch₇** に当てはまる。しかし 4) の例文と 6) の例文は **doch₁** に当てはまるのか、**doch₂** に当てはまるのか、この一文だけでは判断がつかなかった。たとえば 4) の場合、「彼も人間である」という事実は聞き手との共通認識であり、それを再度示すことで同意を求めているのならば **doch₁** となるし、「彼は極悪人だから話が通じないだろう。」という発話に対して「いやでも彼も人の子だから」というニュアンスで発話されていれば、**doch₂** となるからである。

20 また、6) の場合は、理由付けという機能だけを考えると **doch₂** に当てはまる気もするが、この例文からは相手への反論というニュアンスを読み取ることが出来ない。これが例えば、一人で考え込んでいる相手に向けた言葉ならば **doch₂** に当てはまるが、グードルーンが物理学を専攻したことが話し手と聞き手に共通の認識であるならば、この例文は **doch₁** と考えることができる。これは、心態詞の機能を正しく理解するためには、心態詞が含まれる文全体や、文脈の中で理解しなければならないという心態詞の特徴によるものだと思われる。79

次に、**doch** では **ja** とは違い、それぞれの用法の使用頻度に大きな差が見られることに注目する。まず圧倒的に使用頻度が高かったのは、最初に述べたように **doch₃** (=Aufforderung) であった。反対に、全く例文が見つからなかったのは **doch₄** である。また **doch₅** は上述した 7) の例文だけしか見られなかった。これには様々な理由が考えられると思うが、その一つは、

この doch が用いられる状況がとても限られたものだからではないだろうか。つまり発話状況が限定的過ぎて、そもそもあまり使用されないため、テキストでの記述も見当たらなかったのではないだろうか。その他の doch は使用頻度に差は見られなかった。

5

以上のように DaF のテキストにおける心態詞 ja と doch について見てきたが、どちらも簡単な意味の説明とその例文を一文記載するに留まっていることが多かった。ja に関しては、その用法も少ないため、簡単な意味の説明と一つの例文だけでも理解できたが、doch に関しては用法が多く、
10 とくに同じ文タイプで用いられるものもあるため、例文を一つ挙げ、その例文内での doch の機能を端的に述べるだけでは不十分であると思われた。また、用法によって記述される頻度に差があるのは、普段の会話での使用頻度に関係があるのではないかと思われる。

15 第三節 今後のドイツ語教育における心態詞のあり方

これまで心態詞の歴史を遡り、心態詞のもつ複数の用法すべてに共通する意味機能について調べてきた。なぜならば、そのような意味機能を把握することで心態詞を理解しやすくなると思ったからである。それについて
20 は、佐藤清昭(1993)でも、複数の用法を単に並列して提示するだけではなく、そこに共通する「本質」を分かりやすい形で示して見せることは、学習者に大きな手助けとなるはずである⁸⁰と指摘されている通りである。

前にも述べたように、心態詞はその定義が曖昧であり、どの語を心態詞とするか、どのような用法があるかは研究者によって様々である。特に心態詞は特定の訳語が無い
25 ため、また発話状況によってそのニュアンスが変わるため、すべての用法をその発話状況と合わせて記憶していくというのは困難であるし、そもそもすべての用法というものを提示することが難しいのである。そのため、すべての用法に共通する意味機能、その語の核となるような意味機能を理解することで、あとは発話状況に合わせてその中
30 心となる意味機能から発展させていけば、それぞれの用法を推測することができるのではないかと考えたのである。

しかし、心態詞の用法の中には意味の希薄化が著しいものもある。例え

ば、要求文に用いられる心態詞 **doch** では、**doch** がもつ本来の意味が極めて希薄化し、条件文との区別のためだけに義務的に用いられるようになっている。このような用法は本来の意味機能と例文を見ただけでは、正しく理解するのは困難であると思われる。そこで私なりに、ドイツ語学習者の視点から、どのように今後のドイツ語教育に心態詞を取り入れると良いかを考えてみたいと思う。

まず心態詞という品詞の説明であるが、心態詞の定義はとても曖昧であり、いくつかの条件や特徴はあるが例外も多く、それによって心態詞に含まれる語も変わってくる。教育の場面では、**DaF** のテキストのように、心態詞は話し手の心的態度を表現するものであるということを説明するだけに抑えてもいいのではないかと思う。また、心態詞は主に会話の中で用いられるものであるということから、心態詞は基本的にアクセントをもたない、という特徴は重要であり、説明した方が良く思う。ただし『ドイツ語副詞辞典』にある心態詞 **ja** の用法①～③のように、例外的にアクセントをもつ心態詞もあるので、例外に関してはその都度説明が必要である。生きたコミュニケーションのための教育という点では、心態詞自体の詳しい説明よりも個々の語の意味や発話状況の説明に重点を置いた方が良く思われる。

20

それでは、具体的に **ja** と **doch** について考えていく。まず **ja** であるが、これまで見てきたように、**ja** が持つ本来の意味機能はやはり肯定である。そして、そこからいろいろな用法が派生していると考えられる。そのためまず、この本来の意味機能を提示し個々の用法を説明するのが良いと思う。どの用法を取り上げるかについては、**DaF** のテキストで見られた **Übereinstimmung**、**Überraschung**、**Drohung/ Warnung** という3つの用法を中心に説明するのが良いのではないだろうか。それぞれの用法の使用頻度にはあまり差が見られなかったため、3つとも重要であり、知っておく必要があると思われる。『ドイツ語副詞辞典』ではより詳細な分類がされていたが、こちらは文学作品から多くの使用例を持ってきており、前後の文脈から読み取られるような心情など、とても細部まで捉えられているため心態詞の理解を深めるにはとても役立つが、生きたコミュニケーション

30

のためのドイツ語学習という点ではもう少し抽象度をあげて考えた方がよいと思われる。上記の3つの用法はどれも本来の意味機能である肯定から、それぞれ異なった発展の仕方をしているため、この3つを知っておけば、発話状況に合わせてより様々な心態詞のニュアンスを理解することができるのではないだろうか。

次に **doch** であるが、これも **ja** と同様に **doch** のもつ本来の意味機能である逆接をまず最初に提示し、そこから個々の用法を見ていくのが良いと思われる。**doch** は『ドイツ語副詞辞典』でも DaF のテキストでも比較的多くの用法が記述されていたが、**ja** の3つの用法と比べると **doch** の用法は本来の意味機能である逆接とそこから発展して反論、抗議といったニュアンスを覚えておけば、比較的わかりやすいように感じられた。その一方で、要求文に用いられる **doch** は、前にも述べたように、本来は現実と要求の間にある逆接から **doch** が用いられてはいるのだが、逆接というニュアンスはほとんど反映されておらず、条件文と願望文を区別するための文法上義務的なものとなっているためその説明が必要であると思われる。

また要求文に用いられる **doch** (= **doch**₃) は使用頻度が圧倒的に高い上に、**mal** や **endlich** など、他の心態詞との併用によってそのニュアンスがまったく異なったものになるため、この用法もしっかりと説明する必要があると思われる。

まとめ

本論文では心態詞が持つ様々な用法を理解するために、それらすべてに共通する意味機能を見つけ、それを今後どのように学習に生かしていけばよいか、**ja** と **doch** に注目して考えて来た。まず最初に心態詞成立の流れを概観した。それによれば、心態詞 **ja** は中高ドイツ語の文の前域に出現する **ja** と時の副詞 **ie** の混合物であり、その過程で時の副詞としての意味機能が失われたことが分かった。また **doch** では、最も古い **doch** は副詞あるいは接続詞の **doch** であり、心態詞のような機能を持った **doch** は古高ドイツ語の時代から見られるものの、文の中域に出現するという心態詞の定義を考慮すると、その成立はやはり後期中高ドイツ語から初期新高ドイツ語の時代であると分かった。

そしてこの結論から、**ja** が持つ本来の意味機能を「肯定」、**doch** の持つ

本来の意味機能を「逆接」と考え、心態詞の詳細な説明と多くの例文が収録されている『ドイツ語副詞辞典』における ja と doch の記述を調べた。そこでは大半の用法は「肯定」と「逆接」で説明出来たが、条件文に用いられる心態詞 ja に関してのみ、説明がつかなかった。これに関しては今後

5 さらなる研究が必要であると思われる。

そして最後にドイツ語学習において心態詞をどのように扱うと良いか考えた。心態詞は日常会話で頻繁に用いられるものであることから、ドイツ語初学者であっても心態詞という、話し手の気持ちを表す語があるということは知っていた方が良いと思われる。ただし各々の語が持つすべての用法を列挙し、覚えていくのには限界があるため、すべての用法に共通する意味機能を理解する必要があると思われる。

10

本論文では ja と doch の二つの心態詞しか扱っていないが、他の心態詞に関しても同様に、最も古い用法からその語が持つ本来の意味機能を見つけることができるだろう。そしてその意味機能を理解することで、心態詞への理解が深まり、ドイツ語学習にも生かせるのではないかと私は思う。

15

注

- 1 Anna Molnár: Die Grammatikalisierung deutscher Modalpartikeln. Frankfurt am Main 2002. S. 93.
Opalka (1979) untersucht als Erster eine einzige Periode in der historischen Entwicklung von *ja*, das Gotische, und gibt — seiner pragmalinguistischen Konzeption entsprechend — eine Funktionsbestimmung der *ja*-Verwendungen als Redesignale.
- 2 E. ヘンツェル、W. ヴァイト 『ハンドブック現代ドイツ文法の解説』西本美彦、高田博行、河崎靖訳、同学社、1994年、297項
- 3 Molnár a.a.O., S. 93.
Hentschel (1986) ist der Genese der MP *ja* durch mehrere Perioden der Sprachgeschichte nachgegangen — wobei das Gotische, das Alt- und Mittelhochdeutsche die Schwerpunkte bilden — und behauptet, daß die MP bereits im Gotischen im vokativischen Gebrauch vorhanden war. Dort soll es ein Bezugnehmen auf die reale Anwesenheit des Ausgesprochenen signalisiert haben. Sie interpretiert die gotischen Verwendungen von *ja/jai* als Metakommentare, die auf die kommunikative Situation hinweisen, und so identifiziert sie diese Vorkommstypen mit der Funktion der neuhochdeutschen MP *ja*.
- 4 Ebd. S.93.
Auch W. Abraham (1990) referiert Hentschels Ausführungen, er stellt aber fest, daß sowohl im Althochdeutschen als auch im Mittelhochdeutschen das Mittelfeldvorkommen (MF) als die Vorbedingung für die Einstufung als MP fehlt.
- 5 Ebd. S. 94.
G. Diewald (1997) ... teilt Hentschels semantische Kriterien zur MP-Bestimmung, so daß sie auch zu der Einsicht kommt, daß *ja* — zusammen mit *doch* — die älteste MP ist, weil sie bereits im Althochdeutschen nachweisbar sei.
- 6 Ebd. S. 94.
Zur Chronogie der MP-Entstehung äußert sich Burkhardt (1994), der vorwiegend anhand von Wörterbuchangaben *ja* erst auf das 16. Jahrhundert datiert.
- 7 Ebd. S. 94.
Chronologische Beweise liefert auch J. Schild (1987, 1992), der den Modalwortbestand der Leipziger Frühdrucke in der ersten Hälfte des 16. Jahrhunderts bzw. in dem Zeitraum zwischen 1570-1730 untersuchte. [...] Aus seinen Untersuchungen geht deutlich hervor, daß *ja* als Modalwort [d.h. als MP— A.M.] in der ersten Hälfte des 16. Jahrhunderts in 70 Frühdrucken nur zu den **relativ selten** verwendeten Modalpartikeln gehört.
- 8 Ebd. S. 94.
In einem von ihm untersuchten Sprachlehrbuch aus dem Jahre 1424 kommen zwar MP schon vor, aber *ja* wird nicht als MP, sondern nur als Antwortpartikel nachgewiesen.
- 9 Ebd. S. 94.
[...] Meibauer (1994: 158ff.), der eine große Zahl frühneuhochdeutscher Texte ausgewertet hat und bei seiner MP-

Definition streng das Mittelfeldkriterium vor Augen hält. [...] Meibauer nimmt in Anlehnung an H. Paul an, daß die MP *ja* aus der Vermischung von ahd. mhd. satzeinleitend-bekräftigendem *ja* mit dem temporalen *je* entstanden ist.

10 Ebd. S. 95.

MP erachte ich als MF-Einheiten, stufe sie also nicht nach semantischen sondern nach syntaktischen Kriterien ein.

11 Ebd. S. 97.

Auffällig ist in den untersuchten frühneuhochdeutschen Texten, daß an der Stelle der heutigen MP *ja* oft *je* (auch in den Schreibvarianten *je*, *ye*, *ie*) im Mittelfeld steht. Die Zahl der *je*-Belege ist größer als die der *ja*-Vorkommen. Von insgesamt 100 *je*-Belegen in den zwei Büchern stehen 39 (also doppelt so viel wie *ja*) im Mittelfeld und wahrscheinlich auch in der Funktion der MP *ja*.

12 Ebd. S. 98.

Die frühesten *je*-Belege der frühneuhochdeutschen Zeit stammen bereits aus dem 15. Jh. Und das letzte Vorkommen in den untersuchten Korpora stammt aus dem Jahre 1555. (*Ja* erscheint dagegen in MF-Position in meinen Belegen 1523 zum ersten [...]). Es kann tatsächlich belegt werden, daß eine MP als Mittelfeldeinheit mit der Funktion des heutigen *ja* in frühneuhochdeutscher Zeit vorhanden war, sie kam aber nicht nur als *ja* vor, sondern hatte entweder die Form *je/ie/ye* oder *ja/ia/ya*, [...], d.h. für das 15. Jh. schon mit Gewißheit grammatikalisiert.

13 訳は筆者による。

14 ハルトマン・フォン・アウエ『哀れなハインリヒ』戸澤明訳 東京大学書林 1985年、119ページ 日本語訳参照

15 Molnár a.a.O., S.98-99.

In diesem Fall würde der Satz mit *ja* als Begründung gelten dafür, daß der arme Heinrich den Eltern [des Mädchens, das für ihn sterben will] nicht Leiden verursachen will.

16 ハルトマン・フォン・アウエ、前掲書、162ページ 日本語訳参照

17 Molnár a.a.O., S.99.

Hier wäre meines Erachtens, auch eine andere Interpretation möglich, wonach *ie* in der Bedeutung von *ja* ausgelegt wird, weil der inhaltliche Hintergrund, auf den *ie* zurückverweist und den man mit *ie* assertiert, in den vorangehenden Zeilen geschildert wird:

18 Ebd. S.100.

Ähnliches gilt auch für das zweite *ie*, das aus heutiger Sicht ebenfalls zwei Interpretationen ermöglicht: [...]. Das Fehlen des Temporaladverbs *allzeit*, immer verrät in Grimms Auslegung, daß dieses *ie* auch von Grimm eher als *ja*, d.h. als MP, gedeutet wurde, die aus dem Satz eliminierbar bzw. durch die begründende Konjunktion denn paraphrasierbar war.

19 ハルトマン・フォン・アウエ、上掲書、77ページ 日本語訳参照

20 同上、105ページ 日本語訳参照

21 Molnár a.a.O., S. 102.

- Das semantische Spenderlexem für die neuhochdeutsche MP *ja* war die satzeinleitende althochdeutsche, mittelhochdeutsche Partikel *ja*, die MP ist durch Kontamination dieser satzeinleitenden Partikel mit dem mittelhochdeutschen Temporaladverb *ie* entstanden. Bei der Vermischung der zwei Formen spielte die Bedeutung des Temporaladverbs keine Rolle.
- 22 Ebd. S. 107.
Nach Burkhardt ist *doch* zusammen mit *denn* die älteste Modalpartikel des Deutschen, die seit althochdeutscher Zeit in dieser Funktion belegt ist.
- 23 Ebd. S. 107.
Hentschel hat nachgewiesen, daß *doch* in althochdeutscher Zeit als adversative Konjunktion, als Adverb und auch in MP-Funktion vorhanden war. Allerdings ist ihr MP-Verständnis stark funktions-orientiert: MP sind für sie Wörter, die eine gewisse metakommunikative Funktion erfüllen; ihre Stellung im Satz ist lediglich sekundär. [...] Hentschel weist *doch* in **althochdeutscher Zeit in Entscheidungs-(!) und W-Fragesätzen, Imperativsätzen**, in abhängigen daß-Sätzen, die eigentlich **finale Nebensätze** sind und einen Wunsch ausdrücken, nach.
- 24 Ebd. S. 109.
Für die mittelhochdeutsche Zeit liefert Hentschel Belege von *doch*-Vorkommen in folgenden Satztypen: Bestimmungsfrage [d.h. W-Interrogativsatz], Imperativsatz, Assertionssatz, Exklamationsatz, in Nebensätzen: Relativsatz und konditionaler Nebensatz ohne Hauptsatz, d.h. der heutige Wunschsatz
- 25 吉島茂、井上修一、鈴木敏夫、新井皓史、西山カ也編訳『ドイツ文学歴史と鑑賞』朝日出版 1973年、3ページ 日本語訳参照
- 26 Molnár a.a.O., S. 109.
Das erste *doch* ist satzeinleitend [...] ist also ein Adverb mit der Bedeutung 'dennoch, trotzdem'. Dieses *doch* drückt Adversativität explizit, auf propositionaler Ebene aus. Das zweite *doch* steht im Mittelfeld, also an der klassischen Stelle einer MP. Durch wird in den Satz eine mögliche, sprachlich nicht formulierte gegensätzliche Ansicht eingebracht und gleich ausgeräumt.
- 27 ハルトマン・フォン・アウエ 上掲書、110ページ 日本語訳参照
- 28 Molnár a.a.O., S.113.
Zweitens ist es möglich, daß dieser Satztyp mit *doch* [...] in der frühneuhochdeutschen Zeit nicht sehr verbreitet war. Versucht man diese Tatsache zu deuten, so könnte z.B. angenommen werden, daß *doch* in Wunschsätzen einen hohen Grammatikalisierungsgrad erreicht hat, der frühneuhochdeutsch noch nicht erreicht ist oder selten zur Anwendung kommt [...]. *Doch* ist im Wunschsatz tatsächlich ein hochgrammatikalisiertes, semantisch stark entleertes Zeichen mit der grammatischen Funktion, den Wunschsatz vom Konditionalsatz zu unterscheiden. Die Adversative Bedeutung, der Gegensatz zwischen Wunsch und Realität ist dabei ziemlich schwach ausgeprägt und kann nicht ausschlaggebend für den Gebrauch sein, sonst könnte man *doch* in Wunschsätzen nicht durch nur oder bloß ersetzen.

- 29 Ebd. S. 113.
Typisch frühneuhochdeutsch erscheint dagegen die Funktion von *doch* als sog. verdeutlichende Partikel in **Konzessivsätzen**. [...] Im Falle von *doch* stammt sie wahrscheinlich in der Bedeutung ‘obwohl’ belegt ist, [...]
- 30 Ebd. S. 114.
Die Entscheidungsfrage ist ein V-Erst-Satztyp. *Doch* tritt als MP in folgenden V-Erst-Typen auf:
— uneingeleiteter Wunschsatz
— Imperativsatz
— V-Erst-Aussagesatz
Bei diesen drei Satztypen steht das Verb nur im V-Erst-Aussagesatz im Indikativ, wie das bei der Entscheidungsfrage der Fall ist; in den beiden anderen Satztypen steht das Verb im Konjunktiv bzw. im Imperativ, die den Satztyp ohnehin identifizieren. Wäre *doch* also auch in Entscheidungsfragesätzen möglich, so bestünde die Möglichkeit des Verwechselns mit dem V-Erst-Aussagesatz, [...].
- 31 詳しくは第二章 第二節 参照
- 32 Molnár a.a.O., S.115.
In einer Entscheidungsfrage möchte der Sprecher wissen, welcher von zwei möglichen Sachverhalten zutrifft. Dabei weist er nicht auf gewisse Vorannahmen, [...] der Sprecher legt seine absolute Unkenntnis über den Sachverhalt offen und schließt dadurch die Möglichkeit einer gemeinsamen Kommunikationsbasis aus. In einer solche Situation hat *doch* als Verweismittel auf die vorausgesetzte gemeinsame Kommunikationsbasis nichts zu suchen.
- 33 Ebd. S. 117
Durch ihre Einblendung in die Entstehungsgeschichte der MP *doch* konnte aber darauf hingewiesen werden, daß sich bei der Grammatikalisierung eines einzigen Spenderlexems manchmal mehrere Grammatikalisierungsprozesse abspielen oder einander überschneiden, so daß man sich Grammatikalisierung nicht unbedingt als einen einspurigen, chronologisch linearen Prozeß vorzustellen hat.
- 34 Gerhard Helbig: Lexikon deutscher Partikeln. Leipzig. 1988. S.32.
e) Sie beziehen sich auf den ganzen Satz.
- 35 岩崎英二郎 『ドイツ語の副詞・心態詞研究—読解力の向上を求めて—上巻』 同学社 2013年、188 ページ
- 36 訳は筆者による。
- 37 Helbig a.a.O., S. 167.
- 38 訳は筆者による。
- 39 訳は筆者による。
- 40 筒井友弥 「心態詞 ja の含意に関する試論—„Du hast ja vielleicht Recht“の解釈について—」 『研究論叢』 88 2017年、176 ページ
- 41 関口存男 「Doch とは何ぞや？」 『関口存男生誕 100 周年記念著作集 ドイツ語学篇 3 ドイツ語学講話』 1994年、201 ページ
- 42 訳は関口に従う。
- 43 佐藤清昭 「関口存男の「やっぱり」は心態詞にも該当—「Doch とは

- 何ぞや？」の構造主義的解釈」『探求 ドイツの文学と言語 立川洋三先生定年退職記念論文集』1995年、8ページ
- 44 同上 11ページ
- 45 Molnár a.a.O., S.116.
- 46 Helbig a.a.O., S. 111.
in Aussagesätzen; unbetont
Mit doch wird an gemeinsame Wissenbasis appelliert, Sprecher will seine Einstellung auf Hörer übertragen und ihn illokutiv zur Zustimmung auffordern (dabei einen leichten Widerspruch ausräumen).本文中の日本語訳は筆者による。
- 47 Ebd. S. 112.
in Aussagesätzen; unbetont
Bezieht sich reaktiv auf vorangegangenen Sprechakt (Vorgängerzug) und stellt zwischen ihm und der durch doch₂ kommentierten Aussage einen leichten Widerspruch her; [...] Vorgängerzug kritisiert oder zurückgewiesen wird.
本文中の日本語訳は筆者による。
- 48 山田容子「ドイツ語の平叙文における心態詞 doch の働き」『思言 東京外国語大学記述言語学論集 第2号』 2006年、185ページ
- 49 Helbig a.a.O., S. 112.
Illokutiv handelt es sich um eine Zurückweisung [...], um einen Vorwurf, einen Gegenvorwurf bzw. eine Rechtfertigung (=aber). Mit Textverknüpfung und Rückwärtskonnektion ist oft begründende Funktion verbunden.
本文中の日本語訳は筆者による。
- 50 関口存男 上掲書、205ページ
- 51 Helbig a.a.O., S. 116.
Die Überraschung bezieht sich auf das Daß des Sachverhalts selbst (wie ja₂), nicht auf das Wie des im Ausruf geäußerten Sachverhalts (wie aber₁ und vielleicht₁).
- 52 Molnár a.a.O., S. 105.
- 53 在間進『リファレンス・ドイツ語 ドイツ語文法の「すべて」がわかる』第三書房 2017年、205ページ
- 54 鷺巣由美子『NHK出版 これならわかるドイツ語文法 入門から上級まで』NHK出版 2016年、325ページ
- 55 これらのドイツ語は全てテキストに記述されていたものであり、訳は筆者による。
- 56 Christian Fandrych, Ulrike Tallowitz: Klipp und Klar
Übungsgrammatik Grundstufe Deutsch in 99 Schritten. Stuttgart 2004. S.84.
- 57 Ebd. S.84
- 58 Wolfgang Rug, Andreas Tomaszewski: *Grammatik mit Sinn und Verstand*. Stuttgart 2006. S.202.
- 59 Clemens Bahlmann, Eva Breindl, Hans-Dieter Dräxler, Karin Ende, Günther Storch: *Unterwegs kursbuch*. 6. Auflage Berlin und München 2004. S.146.
- 60 Helbig a.a.O., S.165.
- 61 Hans-Jürgen Hantschel, Paul Krieger: *Mit Erfolg zur Mittelstufenprüfung Übungsbuch*. Stuttgart 2002. S.15.
- 62 Ebd. S.15

- 63 Clemens Bahlmann, Eva Breindl, Hans-Dieter Dräxler, Karin Ende, Günther Storch: *Unterwegs kursbuch*. 6. Auflage Berlin und München 2004. S.146.
- 64 Hans-Jürgen Hantschel, Paul Krieger: *Mit Erfolg zur Mittelstufenprüfung Übungsbuch*. Stuttgart 2002. S.15.
- 65 Hans-Peter Apelt, Mary L. Apelt: *plus deutsch 2 Lehrerhandbuch*. Stuttgart 2003. S.21.
- 66 Hubert Eichheim, Günther Storch: *Mit Erfolg zum Zertifikat Deutsch Übungsbuch*. Stuttgart 2004. S.150.
- 67 Ebd. S.150.
- 68 Anne Vorderwülbecke: *Das Grammatikheft*. Stuttgart 2003. S.28.
- 69 Rosa-Maria Dallapiazza, Eduard von Jan, Til Schönherr: *Tangram aktuell 1 Lektion 5-8 kursbuch+arbeitsbuch*. 3. Auflage Ismaning 2009. S.144.
- 70 Clemens Bahlmann, Eva Breindl, Hans-Dieter Dräxler, Karin Ende, Günther Storch: *Unterwegs kursbuch*. 6. Auflage Berlin und München 2004. S.146.
- 71 Wolfgang Rug, Andreas Tomaszewski: *Grammatik mit Sinn und Verstand*. Stuttgart 2006. S.204.
- 72 Helbig a.a.O., S. 111.
in Aussagesätzen; unbetont
Mit doch wird an gemeinsame Wissensbasis appelliert, Sprecher will seine Einstellung auf Hörer übertragen und ihn illokutiv zur Zustimmung auffordern (dabei einen leichten Widerspruch ausräumen).
- 73 Ebd. S. 112.
in Aussagesätzen; unbetont
Bezieht sich reaktiv auf vorangegangenen Sprechakt (Vorgängerzug) und stellt zwischen ihm und der durch doch₂ kommentierten Aussage einen leichten Widerspruch her; [...], da Vorgängerzug kritisiert oder zurückgewiesen. Mit Textverknüpfung und Rückwärtskonnektion ist oft begründende Funktion verbunden.
- 74 Ebd. S 113.
in Aufforderungssätzen; unbetont
[...]; verstärkt eine Aufforderung und drückt damit Wunsch nach Änderung aus, kann dringend, ungeduldig, ärgerlich oder vorwurfsvoll (vor allem in Verbindung mit endlich oder immer), kann aber auch beruhigend, höflich oder eher beiläufig (z. B. in Verbindung mit bitte oder mal) wirken [...].
- 75 Ebd. S. 114.
in Ergänzungsfragen; unbetont
Drückt aus, daß mit der Frage an Bekanntes, aber Vergangenes und in Vergessenheit Geratenes erinnert wird, das der Sprecher vom Hörer (wieder) erfahren will.
- 76 Ebd. S. 115.
in Sätzen, die der Intonation nach Entscheidungsfragen sind, aber die Wortstellung von Aussagesätzen haben; unbetont
Sprecher [...] möchte durch Formulierung der Frage eigene Sorge und Zweifel durch die Antwort des Hörers (eine Antwort mit ja wird erwartet und bevorzugt) aus dem Wege räumen [...]

77 Ebd. S. 116.

in Ausrufesätzen mit Zweistellung des finiten Verbs, entweder mit einleitendem Fragewort (Wortstellung der Ergänzungsfrage) oder ohne einleitendes Fragewort; unbetont
Signalisiert keinen eindeutigen Rekurs auf gemeinsame Wissensbasis (wie etwa doch₁ oder doch₄), sondern [...] einen Widerspruch zwischen den Erwartungen des Sprechers und dem geäußerten Sachverhalt, damit eine Korrektur des eigenen Wissens, verbunden oft mit Erstaunen, Überraschung, Entrüsten o. ä.

78 Ebd. S. 117.

in Wunschsätzen (die der Form nach selbstständige eingeleitete oder uneingeleitete Konditionalsätze sind); unbetont
Kennzeichnet die Äußerung als dringenden Wunsch [...], der in der realen Sprechsituation nicht erfüllbar, nur in der Zukunft erfüllbar (dann mit Konjunktiv Präteritum) oder unreal und unerfüllbar (dann mit Konjunktiv Plusquamperfekt) ist;
verbunden ist Widerspruch zwischen Wunsch und Wirklichkeit.

79 岩崎英二郎 上掲書、51 ページ。

80 佐藤清昭 上掲書、14 ページ。

参考文献

Anna Molnár: *Die Grammatikalisierung deutscher Modalpartikeln*.
Frankfurt am Main 2002.

Gehard Helbig: *Lexikon deutscher Partikeln*. Leipzig 1988.

Elke Hentschel / Harald Weydt: *Handbuch der deutschen Grammatik*.
3. Auflage Berlin 2003.

Hermann Paul / Werner Betz: *Deutsches Wörterbuch*. 5. Auflage
Tübingen 1966.

Harald Weydt : *Abtönungspartikel*. Berlin 1969.

ハルトマン・フォン・アウエ 『哀れなハインリヒ』 戸澤明訳、東京大学書
林、1985年。

G. ヘルビヒ、J. ブッシャ 『現代ドイツ文法』 在間進訳、三修社、1982年。

E. ヘンツェル、W. ヴァイト 『ハンドブック現代ドイツ文法の解説』 西本
美彦、高田博行、河崎靖訳、同学社、1994年。

在間進 『リファレンス・ドイツ語 ドイツ語文法の「すべて」がわかる』
第三書房、2017年。

井上智子 「心態詞 doch の歴史的考察—中高ドイツ語を主に—」
『Sprachwissenschaft Kyoto』 第8号、2009年、33-47頁。

岩崎英二郎 『ドイツ語の副詞・心態詞研究—読解力の向上を求めて—上下
巻』 同学社、2013年。

岩崎英二郎 『ドイツ語副詞辞典』 白水社、1998年。

岡本順治 吉田光演 『講座ドイツ言語学 第1巻 ドイツ語の文法論』 ひつ
じ書房、2013年。

佐藤清昭 「関口存男の「やっぱり」は心態詞にも該当—「Doch とは何ぞ
や？」の構造主義的解釈」 『探求 ドイツの文学と言語 立川洋三
先生定年退職記念論文集』 東洋出版、1995年、1-23頁。

塩谷幸子 「心態詞 doch の機能について」 『独語独文学科研究年報』 20、1993
年、233-247頁。

鈴木康志 「ドイツ語命令・要求表現における心態詞について」 『愛知言語学
教育研究室紀要』 45、2008年、85-110頁。

- 関口存男「Doch とは何ぞや？」『関口存男生誕 100 周年記念著作集 ドイツ語学篇 3 ドイツ語学講話』三修社、1994 年、201-206 頁。
- 宗宮好和「文意味と発話意味—やっぱりと doch の場合—」『ドイツ語学研究 2』千石喬、川島淳夫、新田春夫編、クロノス、1994 年、165-197 頁。
- 筒井友弥「心態詞 ja の含意に関する試論—„Du hast ja vielleicht Recht” の解釈について—」『研究論叢』88、2017 年、167-181 頁。
- 筒井友弥『心態詞の意味と機能の研究—mal を中心に—』広島大学博士論文、2009 年。
- 山田容子「ドイツ語の平叙文における心態詞 doch の働き」『思言 東京外国語大学記述言語学論集 第 2 号』2006 年、185-192 頁。
- 吉島茂、井上修一、鈴木敏夫、新井皓史、西山力也編訳『ドイツ文学 歴史と鑑賞』朝日出版、1973 年。
- 鷺巣由美子『NHK 出版これならわかるドイツ語文法 入門から上級まで』NHK 出版、2016 年。

DaF テキスト一覧

- Brigitte Abel, Peter Bimmel, Eva-Maria Jekins: *Sprachbrücke 1 Arbeitsheft Lektion 8-15*. München 2000.
- Hans-Peter Apelt, Mary L. Apelt: *plus deutsch 2 Lehrerhandbuch*. Stuttgart 2003.
- Hans-Peter Apelt, Mary L. Apelt: *plus deutsch 2 Lehr- und Arbeitsbuch für die Grundstufe*. Stuttgart 2005.
- Saskia Bachmann, Sebastian Gerhold, Bernd-Dietrich Müller, Gerd Wessling: *SICHTWECHSEL NEU 3*. Stuttgart 2000.
- Saskia Bachmann, Sebastian Gerhold, Bernd-Dietrich Müller, Gerd Wessling: *SICHTWECHSEL NEU 3 Unterrichtsbegleiter*. Stuttgart 2004.
- Clemens Bahlmann, Eva Breindl, Hans-Dieter Dräxler, Karin Ende, Günther Storch: *Unterwegs Lehrerhandbuch mit Kopiervorlagen*. 6. Auflage Berlin und München 2003.

- Clemens Bahlmann, Eva Breindl, Hans-Dieter Dräxler, Karin Ende, Günther Storch: *Unterwegs kursbuch*. 6. Auflage Berlin und München 2004.
- Birgit Braun, Margit Doubek, Andrea Frater-Vogel, Nadja Fügert, Renate Köhl-Kuhn, Ilse Sander, Ulrike Trebesius-Bensch, Rosanna Vitale: *DaF Kompakt A1-B1 Übungsbuch*. Stuttgart 2016.
- Rosa-Maria Dallapiazza, Eduard von Jan, Til Schönherr: *Tangram aktuell 1 Lektion 5-8 kursbuch+arbeitsbuch*. 3. Auflage Ismaning 2009.
- Hubert Eichheim, Günther Storch: *Mit Erfolg zum Zertifikat Deutsch Übungsbuch*. Stuttgart 2004.
- Christian Fandrych, Ulrike Tallowitz: *Klipp und Klar Übungsgrammatik Grundstufe Deutsch in 99 Schritten*. Stuttgart 2004.
- Evelyn Frey: *Grammatik von A bis Z*. Stuttgart 2004.
- Hans-Jürgen Hantschel, Paul Krieger: *Mit Erfolg zur Mittelstufenprüfung Übungsbuch*. Stuttgart 2002.
- Sabine Jasny, Andreas Jäger: *STUFEN International 2 Handbuch für den Unterricht*. Stuttgart 2003.
- Gudula Mebus, Andreas Pauldrach, Marlene Rall, Dietmar Rösler: *Sprachbrücke 1*. Stuttgart 1999.
- Martin Müller, Lukas Wertenschlag, Cornelia Gick, Paul Rusch, Theo Scherling, Reinei Schmidt: *Moment mal! Lehrerhandbuch 3*. 5. Auflage Berlin und München 2003.
- Lisa Prange: *44 Sprechspiele*. 2. Auflage Ismaning 2009.
- Marlene Rall: *Sprachbrücke 1 Handbuch für den Unterricht*. Stuttgart 2002.
- Wolfgang Rug, Andreas Tomaszewski: *Grammatik mit Sinn und Verstand*. Stuttgart 2006.
- Ilse Sander, Birgit Braun, Margit Doubek, Nadja Fügert, Rosanna Vitale: *DaF Kompakt A1-B1 Kursbuch*. Stuttgart 2016.

- Theo Scherling, Lukas Wertenschlag, Cornelia Gick, Martin Müller,
Paul Rusch, Reinei Schmidt: *Moment mal! Lehrbuch 3. 5.*
Auflage Berlin und München 2002.
- Theo Scherling, Lukas Wertenschlag, Cornelia Gick, Martin Müller,
Paul Rusch, Reinei Schmidt, Edelgard Weiler: *Moment mal!*
Lehrbuch GS2. 5. Auflage Berlin und München 2003.
- Anne Vorderwülbecke: *Das Grammatikheft.* Stuttgart 2003.
- Anne Vorderwülbecke, Klaus Vorderwülbecke: *STUFEN International 1*
Handbuch für den Unterricht. Stuttgart 2003.
- Anne Vorderwülbecke: *STUFEN International 3 Lehr- und Arbeitsbuch.*
Stuttgart. 2003.
- Anne Vorderwülbecke, Klaus Vorderwülbecke: *STUFEN International 1*
Lehr- und Arbeitsbuch. Stuttgart 2005.
- Anne Vorderwülbecke, Klaus Vorderwülbecke: *STUFEN International 2*
Lehr- und Arbeitsbuch. Stuttgart 2005.
- Lukas Wertenschlag, Theo Scherling, Cornelia Gick, Martin Müller,
Paul Rusch, Reinei Schmidt: *Moment mal! Arbeitsbuch 3. 5.*
Auflage Berlin und München 2002.
- Lukas Wertenschlag, Martin Müller, Theo Scherling, Cornelia Gick,
Paul Rusch, Reinei Schmidt: *Moment mal! Arbeitsbuch GS2.* 5.
Auflage Berlin und München 2003.